

東京景物詩及其他

北原白秋

青空文庫

わかき日の饗宴を忍びてこの怪しき紺と青との
詩集を“PAN”とわが「屋上庭園」の友にささぐ

東京夜曲

公園の薄暮

ほの青き銀色ぎんいろの空気くうきに、

そことなく噴水ふきあげの水はしたたり、

薄明うすあかり ややしばしさまかえぬほど、

ふくらなる羽毛頸卷ボアのいろなやましく女ゆきかふ。

つつましき枯草かれくさの湿るしめにほひよ……

円形まるがたに、あるは楕円だるんに、

劃かぎられし園そのの配置はいちの黄きにほめき、靄かきに三つ四つ

色うす淡うすき紫むらの弧アーク燈とうしたしげに光あかりうるほふ。

春はなほ見えねども、園そののこころに

いと甘あまき沈ちん丁てうの苦くき荅たの

刺さすがごと沁しみきたり、瓦斯ガスの薄うす黄きは

身みを投なげし靈たまのゆめのごと水みづのほとりに。

暮くれれかぬる電でん車しゃのきしり……

凋しれたる調てう和わにぞ修しゆ道だう女めの一人ひとり消くえさり、

裁さい判はんはてし控こう訴そ院いんに留る守す居ゐらの点ともす燈あかりは

疲つかれたる硝が子らすより弊ヒス私テリ的イ里ひの瞳とみを放はなつ。

いづこにかすずろげる春の暗示よ……

陰影ものかげのそこここに、やや強く光劃りて

息いきふかき弧アアクトウ燈カレ枯くさの園そのに歎なげけば、

面黄おもきなる病びやう児幽かに照らされて迷まよひわづらふ。

臃おぼろげのつつましき匂にほひのそらに、

なほ妙たへにしだれつつ噴ふきあげ水の吐息といきしたたり、

新あたしき月つき光かげの沈ちんてう丁しに沁ひみも冷ゆれば

官能くわんのうの薄うすらあかり銀ぎん笛てきの夜よとぞなりぬる。

四十二年二月

鶯の歌

なやましき鶯のうたのしらべよ……

ゆく春の水の上、靄ひあはひの廂合、

凋しをれたる官能くわんのうの、あるは、青みに、

夜よをこめて霊たましひの音をのみぞ啼なく。

鶯はなほも啼く……瓦斯ガスの神經しんけい

酸さんのごと饒すえて顫ふるふ薄うすき硝子がらすに、

失うしなひし恋の通夜つや、さりや、少女をとめの

青ざめて熟視めつつ 闌くる瞳に。

ヒステリイの靈の病めるしらべよ……
憂鬱症

コルタアの香の屋根に、船のあかりに、

朽ちはてしおはぐろの毒の面に

愁ひつつ、にほひつつ、そこはかとなく。

才オロンの三の絃摩るこころか、

ていほろと梭の音たつるゆめにか、

寝ねもあへぬ鶯のうたのそそりの

かつ遠み、かつ近み、静こころなし。

夜もすがら夜もすがら歌ふ鶯……

月白き芝居裏、河岸の病院、

なべて夜の疲れゆくゆめとあはせて、

ウヰスラアーの靄の中音に鳴き鳴きてそこはかとなし。

四十二年一月

夜の官能

湿润ふかき藍色の夜の暗さ……

酸のごとき星あかりさだかにはそれとわかねど

こ濃く淡き溝渠の陰影に、
うす ほりわり かげ

青白き胞衣会社ほのかにほひ、
えなぐわいしや

窓多く、而もみな閉したる真四角の煙艸工場の
しか とぎ ましかく たばここうば

煙突の黒みより灰ばめる煤と湯気なびきちらばふ。
くろ はひ すす ゆげ

橋のもと、暗き沈黙に
くら しじま

舟はゆく……

なごやかにうち青む砥石の面を
としいし おも

いと重き剃刀の音もなく迂るごとくに、
かみそり おと すべ

舟はゆく……ゆけど声なく

ありとしも見えわかぬ棹取の杞憂深げに、
さをとり おそれ

ただ黄きなる燈ともしび火びぞのぼりゆく……孤みなしご児ごの頼たよりなき眼めか。

つつましき尿ねうの香かの滲しみ入るほとり、
腐くされたる酒さけるあ類あの澱おどみ濁にごりて

そここの下げ水すゐよりなやみしみたり、
白おしろい粉こなと湯ゆ垢あかとのほめく闇やみにも
青あおき芽めの春はるの草くさかすかににほふ。

湿しめり潤うるふかき藍あゐいろ色いろの夜よの暗くらさ……

かへりみすれば

いと黒くろく、はた、遠とほき橋はしのいくつの

そのひとつつ青うきしろひ、

神しんけい経つかれの衰弱たえまにぞ絶間なく電車過ぎゆき、

正面まともなる新橋しんぼしの天鵝絨びろうどの空そらの深みに

さまざまの電気燈でんきの裝飾かざり、

それを脱ぬけて紫の弧燈アアクトウにほやかにひとつ湿しめれる。

あはれ、あはれ、爛壞らんゑのまへの官能くわんのうのイルミネエション。

しかはあれども、

湿潤しめりふかき藍色あゐいろの夜の暗くらさ……

溝渠ほりわりの闇やみの中病院うちびやうゐんの舟は消えゆき、

青白えなぐわいしやき胞衣会社えなぐわいしやにほふあたりに、

ととの
整はぬ鶯ぞしみらにも鳴きいでにける。

片恋

あかしやの金きんと赤とがちるぞえな。

かはたれの秋の光にちるぞえな。

片かたこひ恋うすぎの薄着のねるのわがうれひ

「曳舟ひきふね」の水のほとりをゆくころを。

やはらかな君が吐息といきのちるぞえな。

あかしやの金と赤とがちるぞえな。

四十二年三月

四十二年十月

露台

やはらかに浴ゆあみする女子のにほひのごとく、

暮れてゆく、ほの白バルコンき露台バルコンのなつかしきかな。

黄たそがれ昏たそがれのとりあつめたる薄うすあかり明

そのもろもろのせはしなきどよみのなかに、
汝なは絶きたえず来よる夜のよき香料をふりそそぐ。

また古き日のかなしみをふりそそぐ。

汝ながもとに両手もろてをあてて眼病の少女はゆめみ、
 鬱金うこんかう香くゆれるかげに忘れし人もささやく、
 げに白き椅子の感さはり触はふたつなき夢のさかひに、
 官能の甘うなじき頸を捲きしむる悲かなしみ愁かひなの腕に似たり。

いつしかに、暮るとしもなき窓あかり、

七月よるの夜の銀座となりぬれば

静いこころなく呼吸いきしつつ、柳のかげの

銀緑ガスの瓦斯ともの点りに汝なれもまた優になまめく、

四輪車の馬にほひの臭気にほひのただよひに黄なる夕月

もの甘はなくちなしき花くゆり 子の薰くゆりしてふりもそそげば、

病める児のこころもとなきハモニカも
物^{レヂ}語^エのなかに起りぬ。_{ンド}

四十二年七月

S
組
合
の
白
痴

雜艸園

悩ましき黄の妄想の光線と、生物の冷き愁と、——

たましひ
靈の雜艸園の白日はかぎりなく傷ましきかな。

たとふればマラリヤの病室にふりそそがれし

香水と消毒剤と、……窓の外なる蜜蜂の巣と、……

そのなかに絶えず恐るる弊私的里の看護婦の眼と、

りんうご
霖雨後の黄なる光を浴びて蒸す四時過ぎの歎に似たり。

見よ、かかる日の真昼にして

氣遣はしげに点りたる瓦斯の火の病める瞳よ。

かくてまた蹈み入りがたき雑艸の最も淫れしあるものは
肥満りたる、頸輪をはずす主婦の腋臭の如く蒸し暑く、
悲しき莖のひと花のぺんぺん草に縋りしは、

葉瓶もちて休息める雑種児の公園の眼をおもはしむ。

また、緩やかに夢見るときあるものは、

午後二時ごろの「Cafe」に Verlaine 《ウエルレエヌ》のある
ごとく、

ことににくきは日光が等閑になすりつけたる
思ひもかけぬ、物かげの新しき土の色調。

またある草は白猫の柔毛にこげの感じ忘れがたく、

いとふくよかに温臭ぬるくさき残のこり香がの中に吐息しつ。

石鹼シヤボンの泡に似て小さく、簇むらり青むある花は

ひと日浴ゆあみし肺病の女の肌を忍ぶごとく、

洋妾らしやめんめける雁来紅けいとうは

吸ひさしの巻煙草めきちらばひてしみらくに薫ゆる

朝顔の菱しほみてちりし日かげをば見て見ぬごとし。

見よ、かかる日の真昼にして

気遣はしげまたたに瞬ける瓦斯の火の病める瞳よ。

あるものは葱の畑より忍び来し下男のごとく、

またあるものは轢かれむとして助かりし公証人の女房が
甘蔗のなかに青ぎめて佇むごとき匂しつ。

ことに正しきあるものはかかる真昼を
饅^すえ白らみたる鳥屋^{とや}の外に交^つ接^がへる鶏^{とり}をうち目^ま守^もる。

噫^{あゝ}、かかるもろもろの匂のなかにありて

薬草の香^かはひとしほに傷^{いた}ましきかな、

哀^{あは}れ、そは三十路女^{みそぢをんな}の面^{おも}もちのなにとなく淋しきごとく、

活動写真の小屋にありて悲しき銀笛の音^ねの消ゆるに似たり。

見よ、かかる日の真昼にして

氣遣はしげに黄ばみゆく瓦斯の火の病める瞳よ。

あはれ、また

知らぬ間にまものうにま懶きやからはびこりぬ。

ここにこそ恐怖おそれはひそめ。かくてただ盲まうじん人の親は寝そべり、
剃かみそり刀持てる白痴はくちじ兒は匍匐はらばひながら、

こぼれたる牛乳の上を、毛氈を、近づき来る思あり。

またその傍そばに、なにとも知れぬ匂して、
詮せんすべもなく降くだりゆく、さあれ楽しくおもしろき

やぶれかかりし風船の籠かごに身を置く心あり。

あるは、また、かげの湿地しめぢに精液のほひを放つ草もあり。

見よ、かかる日の真昼にして

氣遣しげに青ざめし瓦斯の火の病める瞳よ。

悩ましき黄の妄想の光線と、生物の冷き愁と、

たましひ
靈の雑艸園の白はくじつ日の声もなきかがやかしさを、

時をおき、揺り轟かし、黒くろけぶり烟 たたきつけつつ、

汽車飛び過ぎぬ、かくてまたなにごともなし……。

四十二年十月

わが瞰望は

ありとあらゆる悲愁かなしみの外に立ちて、

東京の午後四時過ぎの日光と色と音とを怖れたり。

七月の白き真昼、

空気の汚穢けがれうち見るからにあさましく、

いと低き瓦の屋根の一片は卑怯にぶに鈍く黄ばみたれ、

あかあかと屋上園に花置くは雑貨の店か、

(新嘉坡の土の香かは莫メリヤス大小の香かとうち咽ぶ。)

また、青ざめし羽目板はめいたの安料理屋の窓の内、

ただ力なく、女は頸かたむけて髪梳る。

(私生児の泣く声は野菜とハムにかき消さる。)

洗濯屋の下女はその時に物干の段をのぼり了り、男のにほひ忍びつつ、いろいろのシヤツをひろげたり。

九段下より神田へ出づる大路には

しきりに急ぐ電車をば四十女の酔人の来て止めたり。
斜かひに光りしは童貞の帽子の角か。

かかる間も収まり難き困憊はとりとめもなくうち歎く。
その湿めらへる声の中

サボテン
霸王樹の蔭に蹲みて日向ぼこせる洋館の病児の如く泣くもあり。

煙艸工場の煙突掃除のくろんぼが通行人を罵る如き声もあり。

白昼を按摩の小笛、

午睡のあとの倦怠さに雪駄ものうく

おしろひ
白粉やけの素顔して湯にゆくさまの芸妓あり。

交番に巡査の電話、

ひろめ
広告の道化うち青みつつ火事場へ急ぐごときあり。

また間の抜けて淫らなる支那学生のさへづりは

氷室の看板かけるペンキのはこび眺むるごとく、

印刷の音の中、色赤き草花凋え、

ほどこかき外科病院の裏手の路次の門弾は

げにいかがはしき病の臭気こもりたり。

（いま妄想の疲れより、ふと起りたる

薬種屋内の人殺、

下手人は色白き去勢者の母。）

何かは知らず、

人かけ絶えてただ白き裏神保町の眼路遠く、

肺病の皮膚青白き洋館の前を疲れつつ、

「刹那」の如く横ぎりし電車の胸の白はくしよく色は一瞬にして隠れた
り。

いたづらに玩弄品おもちゃの如き劇場の壁薄あかく、

ところどころの窓の色、曇れる、あるはやや黄なる、

弊私ヒステリイせい的里性の薄青き、あるは閉せる、

見るからに温室の如き写真屋に昼の瓦斯つき、

(亡き人おもふ哀愁はそこより来る。)

獣医の家は家畜の毛もていろどられ、

齒科病院の帷カーテンは入齒のごとき色したり、

その真中ただなかにただひとつ、研とぎすましたる悲愁かなしみか、

冷ひやき理髪りはつの二階より、

剃かみそり刀の如く閃々と銀の光は瞬またたけり。

あらゆるものの疲れたる七月の午後、

わが瞰望の凡ての色と音と光を圧すごとく、

凡ての上にうち湿る「東京の青白き墳墓」

ニコライ堂の内秘ないひより、薄うすぐら闇ドき円頂閣ドオムを越えて

大釣鐘は騒たましひがしく霊の内と外とに鳴り響く。

鳴り響く、鳴り響く、……

四十二年十月

心とその周囲

I 窓のそと

1

わが窓まどのそと、

黄きなる実みのおよんどんのちまめはちひ小さな光むらがりの簇むらがりをつくり、

葉かかげの水面みのもは銀色ぎんいろの静寂しづけさを織おる。

白くして悩める眼鏡橋めがねばしのうへを

鉄輪かなわを走らしつつ外科医院げくわゐんの児こは過ぎゆき、

氣の狂きひたる助祭じよさいは言葉なく歩み来る。

鐘を撞つけ、鐘を撞つけ、

恐ろしき銀色の鐘を……

この時、近郊を殺戮したる白人の一揆は
 更にこの静かにして小さなる心の領内を犯さんとし、
 すでにその鎗尖のかがやきはかなたの丘の上に閃めけり。

正午過ぎ……一分……二分……三分……

日は光り、そよとの風もなし。

ある日、わが窓の硝子のしたに、

覆くつがへされたる蜜蜂の大きなる巢すはげ激しく臭にほひ、

その周囲めぐりに数かずかぎりなき蜂の群音むれおとたてて光りかがやき、

粗末そまつなる木きの函はこへすべり入り、匍はひめぐる。

かがやかしき歡くわんき喜ひあひと悲哀！

すべてこの銀色ぎんいろの光のなかに

太ふとくしてむくつけき黒人こくじんの手ぞ

働はたらける……甘き甘きあるものを搔きいださんとするがごとく。

その前に負傷ふしやうしたる敵兵てきへい三人みたり、——

あるものは白き布ぬのにて右の腕かひなを吊つるしたり——

日に焼けたる絶望ぜつまうの顔をよせて

そこはかとなきかかる日の郷ノスタルヂヤア愁ウレシに悩むがごとく

珍めづらかにうち眺めたる……足もとの黄色きいろなる花

湿りたる土の香かのさみしさにかけりつつうち凋しをる。

鐘は鳴る……銀色ぎんいろの教会けうくわいの鐘……

硝子窓がらすまどのなかには

薄色うすいろの青き眼めがねをかけたる女、

かりそめのなやみにほつれたる髪かきあげて、

葉くすりびん 罎くすりびん 載おんたくせたる円卓えんたくのはしに肱ひぢつきながら

金字見ゆるダンヌンチオの稗史を閉し、

静かなる杏仁水きやうにんすゐのほひにしみじみときき惚ほれてあり。

ああ午後三時の郷愁ノルタルヂヤア……

II S組合の白痴

夕まぐれ、石油問屋のS組合セキユドビヤ エスクミアヒの入口に、

つめたき硝子戸がらすどのそと、

うち潤る石油色しめ セキユいろの陰影いんえいの中、薄ら光る銀うす ひか ぎんの引手ひきてのそばに
うすばか
薄白痴うすばかのわかきニキタは紫の絹ハンケチを頸くびにむすび、

けふ 今日もまたのんびりだらりと立ちぼうの河岸の

便所に凭るごとく、

のろまな

その鈍き容態のいづこにか睨き眼を働らかせにやと笑ひつ

つあり。

日は向う河岸の家畜病院の顔れたる露台を染め、

入口の硝子戸の前に薬塗らるる色黄なる狂犬を染め、

隣れる健胃固腸丸の広告に苦き光を残しつつ沈みゆく。

S 組合の薄白痴は

石油ににじむ赤き髪けに雑種児あひのこほこりの矜ほこりを思ひ、

けふの夜やしよく食やきも焼。パンにジヤムと牛乳ミルクを購かはんとぞ思ふ。

かかる間まも白銅まのこひしさに

通とほりすがる肥満女ふとつちよの葱ねぎもてる腕かひなよに倚りてうち挑いじどむ。

薄くれがた暮かたの河岸かしのあかしや、二本ふたもとの海岸かしのあかしや、

その葉のゆめの金糸雀かなりやのごとくに散ちるころを、

またしてもくちずさむ、下品げひんなる港みなとまち街ちの小唄こうた。

青き青き溝ほりわり渠みの光は暮れてゆく……

わかきニキタはぼんやりと薄うすゑみ笑えみしつつ、……

十月の枯かれくさ草くさの黄きなるかがやき、そがかげのあひびきの

浮うはつきし声のかすれを思ひいで、

また外ぐわいくわう光むらさきの紫に河岸の燕つばめの飛び翔かけりながら隙すきみ見する

瞳ひとみ青きフランス酒場さかばの淫たはれ女めが湯浴ゆあみのさまを思ひやり、

あるはまた火事ありし日の夕日のあたる草土堤くさどてに

だらしなく擁かかへ出されて薰かをりたる薄黄うすきの、赤の乳にふりよく緑の、青の、

沃土えうどの、

催笑わらひぐすり剤なや泣なきぐすり薬しびれぐすり、痲痺ほれぐすり剤なや惚おんが薬な、そのいろいろの音

楽くの鑼。

さて組合はげあたまの禿はげあたま頭のトムソンが赤つちやけたる鹿爪しかつめらしき古ふ

外るぐわいたう套ををかしがり、

恐ろしかりし夏の日のこと、どくだみの臭くさき花のなかに

「キ：ン：タ：マ：が：い：た：い」と

おしろいあつ　しは
白粉厚き皺づらに力なく啜り泣きつつ、

つひ
終に斃れし旅芸人のかつぽれが臨終の道化姿ぞ目に浮ぶ。

ガスつ
今瓦斯点きし入口の撻押しあけて

にほひ
石油の臭新らしく人は去る、流行の背広の身がるさよ。

かし
いつしかに日は暮れて河岸のあなたはキネオラマのごとく燈点き、

つりぼし
吊橋の見ゆるあたり黄なる月　囀　と音も高く出でんとすれ

ど、

うすばか
あはれなほS組合の薄白痴のらちもなき想はつづく……

III 泣きごゑ

わが寝ねたる心のとなり泣くものあり――

夜を一夜、乳をさがす赤子のごとく

光れる釣鐘草のなかに頬をうづめたる病児のごとく、

あるものは「京終」の停車場のサンドウキツチの呼びごゑ

のごと、

黄にかがやける枯草の野を幌なき馬車に乗りて、

密通したる女のただ一人夫の家に帰るがごとく、

げにげにあるものは大蒜の畑に狂人の笑へるごとく、

「三十三間堂」のお柳にもまして泣くごゑは、

ネル着^つけてランプを点^{とも}す横^{よこ}顔^{がほ}のやはらかき涙にまじり
 理^{バリ}髪^{カン}器^キの銀^{ぎん}色^{いろ}ぞやるせなき囚^{しうじん}人の頭^{かしら}に動^{うご}く。
 そのなかに肥^ふ満^とりたる古^{ふる}寡^ご婦^けの豚^{ぶた}ぬすまれし驚^{おどろ}駭^きと、
 まどそと
 窓^{まど}外の日光を見て四十男の神^{しん}官^{くわん}が
 死^しのまへに噉^{すすり}泣^{なき}せるつやもなく怖^{おそ}しきこゑ。

ああ夜^よを一夜^{ひとよ}、

わが寝^ねたる心^{こころ}のとなり泣^なくものうれひよ。

IV 銀色の背景

わが悲哀の背景は銀色なり。

そは五月の葱畑のごとく、

夏の夜の「若竹」の銀襖のごとく青白き瓦斯に光る。

そのまへに、——

弊私的里の甚しきは

私通したる洎芙藍色の女の

声もなき白痴の児をば抱きながら入口を見るがごとくに歩み、

かの苦く青くかなしき愁夜曲……

ある夜のわれは恐ろしくして美しき竹本小土佐の

「合邦」の玉手御前の悲歎をば弾語する風情に坐り、

暗き暗き鬱悶うつもんは

鈍銀にぶぎんの引ひかれゆく幕の前に、指組ゆびくめる「仁木につき」のごとく

隈くま青あき眼めの光烟けぶりとともにスツポンの深おき恐怖おそれよりせりあがる。

：

何時いつも何時いつもわが悲哀かなしみの背景バックには銀色ぎんいろの密境みつぎやうぞ住む。

そのなかに鳴きしきる虫の音よ、

句こ高たかき空くう気きの迅はやき顫動せんどう、

太ふと棹ざうと、鋭すき拍ひやう子うし木ぎ、

ああああわが凡すべの官能くわんのうは盲めひんとして静かに光る。

V
神経の凝視

日は暮るる、日は暮るる、ちから力なき鬱金の光……

ゆき馴なれし一本ひともとの榆にれのもと、半壊なかばはれし長椅子ベンチに、
恐ろしき病びやうしつ室むを抜ぬけいでたるわがこころの
神経しんけいの疑うたがひふかき凝ぎようし視……

足もとの、そここの小さき花は
長く長く抱擁はうえうしたるあとの黄色きいろなる興奮こうふんに似て
光り……なげき……吐息といきし……

沈黙ちんもくしたる風は

生前せいぜんの日の遺言状ゆゑごんじやうの秘密ひみつのごとくに刺草いらくさの間に沈み、
 うつく美しき絶望ぜつまうのごとたまさかに蜥蜴とかげす過ぎゆく。

近郊きんかうの鐘は鳴る……修道院しゆだうゐん晩餐ばんさんの鐘……

神経の澄みわたる凝視ぎようしはつづく——

その青くして何物なにもにも吸ひ取らるるがごとき瞳ひとみは

身をすりよする異母妹いぼまいの性せいの恐怖おそれより逃れんとし、

親したしき友人の顔いに陋やしき探偵たんでいの笑わらひを恐れ、

色黄きなる醜みにくき悪縁あくゑんの女をんなを殺さんとし、

さらにはわが生を力あらしめんがために砒素を医局の棚より盗み、
 終にまた響も立てぬ霊の深緑の瞳にうち吸はれ、
 わが心の深淵に突き落されし処女の銀の咽びをきく。

この時、病院の青白き裏口の戸に佇める看護婦は
 携へし鳥籠の青き小鳥の鳴くこゑをさびしみながら、
 角吹ける乗合馬車の遠き遠き黄のかがやきをなつかしむ。

日は暮るる、日は暮るる、力なき鬱金の光……

四十三年二月

物理学校裏

Borun. Bromun. Calcium.

Chromium. Manganum. Kalium. Phosphor.

Barium. Iodium. Hydrogenium.

Sulphur. Chlorum. Strontium. ……

(寂しい声がきこえる、そして不可思議な……)

日が暮れた、淡い^{うす}銀と紫——

蒸し暑い六月の空に

暮れのこる棕櫚の花の悩ましさ。

黄色い、新しい花穂ふさの聚あつまり団だんが

暗い裂けた葉の陰影かげから噎むせる如やうに光る。

さうして深い吐息といきと腋臭わきがとを放はなつ

歯痛しつうの色の黄きな、沃土ホルムの黄きな、粉こなつぽい亢奮きなの黄きな。



蒼白い白熱瓦斯の情調ムウドが曇硝子を透して流れる。

角窓のそのひとつの内部インテリオルに

光のない青いメタンの焰が燃えてるらしい。

肺病院の如やうな東京物理学校の淡うすい青せいくわいしよく灰色の壁に

いつしかあるかなきかの月光がしたるる。

[Ti^N ti^N ti^N. n. n. n ti^N.n]

[tire tire ti^N.n. n. n. n. syn]

t t t t tone tsn. n. syn. n. n. n. n t

静かな悩ましい晩、

何処かにお稽古けいこの琴の音がきこえて、

崖下の小さい平家ひらやの亜鉛屋根に

コルタアが青く光り、

柔らかい草やはいきれの底に Lamp の黄色い赤みが点る。

その上の、見よ、すこしばかりの空地あきちには

湿しめつた胡瓜と茄子の鄙びびた新にほひらしい臭におひが

惶^{あわ}ただしい市街生活の 哀^{あい}愁^{しゆう}に縛れる……

汽笛が鳴る……四谷を出た汽車の Cadence 《カダンス》が近づく

……

暮れ悩む官能の棕櫚

そのわかわかしい花穂^{ふさ}の臭^{におひ}が暗みながら噎^{むせ}ぶ、

齒痛の色の黄、沃土ホルムの黄、粉つぽい亢奮の黄。

寂しい冷たい教師の声がきこえる、そして不可思議な……

そこここの明^{あか}るい角窓のなかから。

Sim ……; Cosin ……; Tan ……; Cotan ……; Sec ……; Cosec ……; et
c ……

Ion. Dynamo. Roentgen. Boyle. Newton.

Lens. Siphon. Spectrum. Tesla の火花

摂氏、華氏、光、Bunsen. Potential. or, Archimedes. etc, etc……

棕櫚のかけには野菜の露にこほろぎが鳴き、

無意味な琴の音の稚をこなびた Sentiment は

何時までも何時までもせうことなしに続いてゆく。

汽笛が鳴る……濠ほり端ばたの淡うすい銀と紫との空に

停車とまつた汽車が蒼みがかつた白い湯気を吐いてゐる。

静かな三分間。

悩ましい棕栢の花の官能に、今、

蒸し暑い魔睡がもつれ、

暗い裂けた葉の縁ふちから銀の憂メランコリイ鬱ふさがしたたる。

その陰影かげの捕捉とらへがたき Passion の色、

齒痛の色の黄きな、沃土ホルムの黄きな、粉つぽい亢奮きなの黄。

Neon. Flourum. Magnesium.

Natrium. Silicium. Oxygenium.

Nitrogenium. Cadimium or, Stibium

etc., etc.

骨なし児と黒猫

四十三年三月

そは恐ろしきXなり。淫らにして不倫なる母のごとく、
 汝が神経と知覚とは痛ましきほど慄けども、力なき骨なし児よ。
 終日、わづらはしき病室の白葡萄酒の如き空気に呼吸
 し、

たましひ
 霊のうつらぬ瞳は唯狂はしき硝子戸の外をうち凝視む。

そが背後の棚の上、やや青みたる陰影の中、

ニツケルの産科さんくわの器械きがい驚おどのごとき嘴はしして光ひかり、
 薄うすく曇くもれる硝子がらすのなかにとりあつめたる薬劑やくざいの鑿びん、
 その青あをく赤あかくおぼめける劇薬げきやくのエチケツテ……鋭すく、
 苦にがし。

ああ骨ほねなし児ごよ。この薄暮くれがたの反射はんしやに、
 柔軟やはらかにして悩なやましき汝なが衾ふすまぎんは銀しめりの潤沢ひかに光ひかれど、
 冷ひややかなる鉄てつの寢台ねだいの上うへ、据すゑられし木造きづくりの函はこは、
 汝なが身みを入いれたる小ちひさき牢獄ひとやは山葵色わさびいろの曇くもりにうち歎なげく。

おとな大人おとなびたる顔かほの白しろき白しろき白おしろい粉おその恐おそろしさよ。

なよなよと凭もたせたる身体からだのしまりなさ。

たましひあを
 靈の青さ、いたましき、
 なまぬ 生温るき風のごと骨もなき手は動く——その空に 鏽 銀の鐘は
 かかれり。

ああ、ああ、いま、今しがたまでぞ、この硝子戸の外には

五時ごろの日の光わかわかしき血のごとくふりそそぎ、

見えざる窓下のあたりより、

抑圧えあへぬ抱擁の笑ひ声きこえしか——葱畑すでに青し。

鏽 銀の鐘よりは一条の絹薄青く下りて光る。

その端をはづかに取りたる手は、その瞳は、

ああ、すべて力ちからなし。——さらにさらに痛いたましきはかかる青あをき薄うす暮れがたの激はげしき官くわんのう能のうの刺戟しげき。

聴きけ、遂つひに、彼かれは泣なく。……

あらず、それは馴染なじみたる黒猫くろねこなりき。ふくらなる身みを跳おどらせて、
 銀色ぎんしよくふすまの衾すその裾すそにのぼりつつ背せを高たかめたる。
 黄きばみたる青葱色あをねぎいろの眼めの光ひかきたる夜よの恐怖おそれにそそぐ。

かくてただ声こゑもなし。青あをく光ひかる硝子戸がらすどに真白ましろなる顔かほふりむけて、
 哀楽あいらくの表へうじやう情じやうもなく親したしげに畜類ちくるゐの眼めと並ならびつつ何なにをか凝み視つむ。

ああ、暗くらき暗くらき葱ねぎばたけ畑たけの地平ちへいに黄きなる月つきいでんとして、
 鏽しやう銀ぎんの鐘かねは鳴なる……幽かすかに、……幽かすかに……やるせなき靈たましひの
 求とめもあへぬ郷ノスタルヂヤア愁ちゆう。

四十三年二月

雪ふる夜のころもち

今夜こんやも雪が降つてゐる。……

Blue devils よ。

酔ひ狂つた俺おれの神経が——

Sara …… sara ……とふる雪の幽かな瞬を聴きわけほほど——

ひつそりと怖気づく、ほんの一時の気紛につけ込んで、

おまへ

汝はやつて来る……顫ひながら例の房のついた尖帽をかぶつて、

搔きむしつた亜麻色の髪の毛、泣き出しさうな青い面つきで、

ふらふらと浮いた腰の、二三尺ほどの脚棍に乗つて、

ひよつくりこつくり西洋操人形のやうにやつてくる。

硝子の閉つた青い街を、

濡れに濡れた舗石のうへを、

ピアノが鳴る……金色の顫音の

潤むだ夜の空気に緑を帯びて消えてゆく。

雪がふる。……

しめ
湿つた劇薬の結晶、

アンチピリンの（頓服剤の）、粉末のやうに――

それがまた青白い瓦斯に映つて

ヒステリー
弊私的里の発作が過ぎた、そのあとの沈んだ気分の雰囲気に

お
落ちついた悲哀の断片がしみじみと降りしきる。

そのとき、

さかば
酒場の薄い硝子から

むちやくちやになつた神経が、馬鹿にしろといふ調子で、

それでも沈まりかへつて、

恐怖おそれと可笑をかしさの眼みはを睜みはつたまま、

ふる雪を、

Blue devils の歩行あゝきを眺めてゐる。

ひよつくりこつくり顫ふるへてゆく……

ピアノに合せた足どりの、ふらふらと両手りょうてを振つて、あかしやの

禿げた並木をくぐりぬけ、

三角形なりの街燈がいたうの鉄の支柱ちゆうちゆうによるけかかつて腰をつき、

そそくさと、そそくさと、内隠かくしから山葵色わさびいろの鑿びんを取り出し、

こくこくと仰向あふむいて、苦さにがうな口くちのあたりに持てゆく。

雪がふる……白く……薄青く……

それが鑿びんを収しまつて

ひよいと此方こちらを見る。

涙の一杯たまつた眼に

張はりのない痲痺まひしきつた笑わらひを洩らしながら、

克こくめい明たましひな靈のかたわれが

ひよつくりこつくり道化だうけた身振に消えてゆく。

ああ、静かな夜よる、

何処どこかに幽かに 杏仁きやうにん水すゐのほひがして

疲れた官能が痺れてくる……

濡れたあかしやが銀ぎんの恐怖おそれに光つて、

一ならば青い硝子に反射する——そのほかは

声もせぬ通の長い舗しきいし石いしのうへを

痺しびれて了しまつた。ピアノの顫せんおん音が、

ふる雪の断片が、

活動写真のまたたきのやうに

音もなく瓦斯の光に顫へてゐる。

雪がふる。

Sara …… Sara …… Sara …… Sara …… Sara ……

薄ら青い、冷たい千万の断片が

落ついた悲哀の光が、

弊私的里の発作が過ぎた、そのあとの沈んだ気分の雰囲気きぶん ふんぬきに、

しんみりとしたリズムをつくつて

しづかに降りつもる。

·Sara …… Sara …… Sara …… Sara …… Sara ……

四十三年六月

解雪

わが憂愁は溶けつつあり、
黄色きいろく赤くみどりに、

屋根の雪は溶けつつあり、
光りつつ、つぶやきつつ、滴りつつ……

日はすでにまぶしく、

菓子屋の煙突よりは烟けむりのぼり、

病犬は跛曳ちんぽきつつ舗石しきいしをゆく、

そのなかに溶けつつあるものの小歌リイド。

やはらかによわく、ほそく、

そは裁縫機械のごとく幽かに、
いそがしく、

さまざまの光を放ちつつ滴る。
したた

喪心さうしんのたのしさを聴け。

薄暗セき地下室セラの厨女くりやめよ、

湯沸サモウルの湯気の呼吸いきも

玉葱のほとりにしづごころなし。

丸の内の三号、

その高き煉瓦より、
筧より、
また廂より、

かくれたる物の芽に沁しみみたる無数の宝玉の溶解ようかい、
温かに劇薬のながれ湿しとる音楽……

わが憂愁は溶とけつつあり、

黄色く、赤く、みどりに、

屋根の雪は溶けつつあり、

光りつつ、つぶやきつつ、滴したたりつつ……

四十三年六月

青い髯

青い髯

ごぐわつ
五月が来た。

硝子と乳房との接せつしよく触……桐の花とカステラ……

春と夏との二声デュエット楽、冷めたい冬……

とりあつめた空気うすの淡い感覚に、

硝子戸のしみじみとした汗ばみに、

さうして、私の剃りたてその青い面かほの皮膚ひふに、

くわうりよく
黄緑の Passion を燃えたたせ、顫はす

日光の痛^{いた}さ、

その眩^まぶしい音楽は負傷兵の鳴らす釣鐘のやうに、

恢復期^{くわいふくき}の精神病患者がかぎりなき悲哀^{ひあい}の Irony に耽けるやうに、

心も身体^{からだ}も疲^{つか}らした

その翌^{あくるひ}日の私の弱い瞼^{まぶた}のうへに、

キラキラとチラチラと苦^{にが}い顫^{せんおん}音を光らす、

強く絶えず、やるせなく……

午前十一時半、

公園の草わかばの傷^{いた}みに病^{びやうけん}犬^{いぬ}の黄^{きいろ}い奴^{やつ}が駈^かけまわり、

禿^{かぶ}げた樹^{じゆもく}木の梢^{しほ}がそろつて新芽^{しんめ}を吹く、

螺旋状らせんじやうの臭におひのわななきと、底そこちから力ちからのはづみと、

Whiskeyの色いろに泡あわだつ呼吸いきづかひと……

而さうして、わかい男おとこの剃そりたての面かほの皮膚かわの下したから

青あおい髯ひげが萌もえる……

五月ごがつが来た。

どこかしらひえびえとした微風びふうが

閃ひらめく噴水ふんすゐの尖端さきからしづれて、

ニホヒイリスや和蘭陀薄荷おらんたはつかのしめりを戦そよがせ、

ぢつと、私が凝視みつむる、

小酒杯リキユグラスの透明むしよくな無色むしよくの火酒ウオツカを顛かぶはし、

くわうりよく、ぐわいくわう
 黄 緑 の 外 光 を浴びた青年の面のうへを、

なめらかに砥石のやうな青みを、

Poeの頬のやうな手ざはりを、

すいすいと剃刀のやうに触れる、

私は無言で冷たい小酒杯をとりあげ、

しみじみと赤い唇にあてる……

五月が来た、五月が来た。

楠が萌え、ハリギリが萌え、
 朴が萌え、
 篠懸の並木が萌える。

そうして、私の

新しいホワイトシャツの下から青い汗あせがにじむ、

植物性の異いしゆう臭と、熱ねつと、くるしみと、……

芽でも吹きさうな身体からだのだらけさ、

(何でもいいから抱だきしめたい。)

萌える、萌える、萌える、萌える、

青い髯あごひげが

ウオツカの沁み込む熱あつい頬ほの皮膚ひふから萌える。……

くわつとふりそそぐ日光、

冷つめたい風、

春と夏との二声デュエット楽、……緑みどりと金きん……

四十三年五月

五月

新しい烏ウーロン茶ちやと日光、

渋味もつた紅あかさ、

湧ときたつ吐息といき……

さうして見よ、

牛乳にまみれた喫きつ茶店さてんの猫を、

その猫が悩ましい白い毛をすりつける

女の膝の弾力。
だんりよく

夏が来た、
なつ

静かな五月の昼、
しづ ぐわつひる サモワル
湯沸からのぼる湯気が、
ゆげ

紅茶のしめりが、
こうちや

爽かな夏帽子の麦稈に沁み込み、
さわや なつぼうし むぎわら
うす おしろい

うつむく横顔の薄い白粉を汗ばませ、
よこがほ せい

而してわかい男の強い体臭をいらだたす。
さう をとこつよ にほひ

「苦しい刹那」のごとく、黄ばみかけて
くる せつな き

痛いほど光る白い前掛の女よ。
いた ひかしろ まへかけ をんな

「烏竜茶ウーロンちゃをもう一杯ぱい。」

銀座花壇

赤あかい花はな、小ちひさい花はな、石せきちく竹ちくと釣つり鐘がね艸さう。
 かなしくよるべなき無む智ち……

瓦ガス斯つの点ついた
 勸くわん工こう場ばのはいりくち、
 明あるい硝しょう子し棚たな、紗しやの日ひ被よけ、

四十三年五月

夏は朝から悩ましいのに

花が咲いた……あはれな石竹と釣鐘草。
つりがねさう

わかい葉柳はやなぎの並木路アベニユ、撒水みづまきした煉瓦道れんぐわみち、

そのなかの小ちひさな人じん口こう花壇くわだん、

つか（疲れた瞳ひとみの避難所ひなんしよ）

その方はう二尺しやくのかなしい区劃しきりに、

夏なつがきて花はなが咲いた、小ちひさい細ほそい石竹せきちくと釣鐘草つりがねさう。

絶たえず絶たえず電でん車しゃが通とほる……

おしろい汗あせを吹ふく草くさの葉はに、

裁縫器ミシンの幽かすかな音おとに、

よせかけた自転車じてんしゃの銀ぎんのハンドルの反射はんしゃ

日は光ひかり、

かるい埃ほこりが薄うすい車輪しゃりんをめぐる……

赤い花、小さい花、石竹と釣鐘草。

さうして女がゆく、

すずしい白しろのスカアト

その手てに持もつた赤皮あかがはの瀟洒せうしゃな洋書ほん、

いつかしら汗あせばんだところに

異国趣味エキゾチックな五月ぐわつが逝ゆく……

あたらしあら新しい銀座ぎんざの夏なつ、

かなしくよるべなき人工じんこうの花はな、

—— 石竹せきちくと釣鐘つりがね草くさ。

四十三年五月

六月

白い静かな食卓テエブルクローズ布、

その上のフラスコ、

フラスコの水に

ちらつく花、釣鐘つりがね草くさう。

つや
光沢のある粹いきな小鉢の
つりがねさう
釣鐘草、

汗ばんだ釣鐘草、

紫の、かゆい、やさしい釣鐘草、

さうして噎むせびあがる

苦い珈琲カウヒイよ、

あつ
熱い夏のころに

私は匙を廻す。

高窓マルキイズの日被

その白い斜面の光から

六月が来た。

その下の都会の鳥瞰景。
てうかんけい

幽かな響がきこゆる、

やはらかい乳房の男の胸ををぎ抑へつけるやうな……

苦い珈琲よ、

かきまわしながら

静かに私のこころは泣く……

四十三年六月

新聞紙

一九一〇、六月、はじめの月曜

冷めたい朝の七時、

つつましい馭者台のうへに、

ただひとり爽かに折りかへす新聞紙の

緑の薄い反射……

微かな鉄分をふくんだ空気に

まだ青味を帯びた棕櫚の花が

かよわい薄黄色に光り、

ちらほらと夏帽子なつぼうしの目めにつく

なつかしいだらだら坂さかの下したの

H分署ぶんしよの前まへの通とほり……せはしい電車でんしやの鐸ベル……

みづまき 撒水夫ポムプの唧筒うごを動かうごかすさびしさ、

ほりばた 濠端ひの火ひの消きえた瓦斯燈がすとうに

白マントルふるが顫ふるへ、

その硝子ガラスの一点てんに 日につくわう 光きんの金ひかが光ひかつてる。

わかい 馭者ぎよしやは

まど 窓まどのないカキ色いろの囚人馬車しうじんばしやを

梧桐あをぎりのかげにひき入れたまま、

しづかに読み耽よふける……

こころもち疲つかれた馬うまの呼吸こきふ……

短みじく刈かつた栗毛くりげの光沢つやから沁しみ出でる

臭におの奇異ふしぎな汗あせばみ、その上うへにさしかくる

新聞紙しんぶんしの新あたらしい触しよく感かん、

わか葉はの薄うすい緑みどりの反射はんしゃ。

新あたらしい客きやくを待まつ間あひだ、

やすらかな五分時ふんじが過すぎゆく……

四十三年六月

畜生

やはらかにかなしきは畜生の
こころなれ。

赤き日はアカシヤのわか葉にけぶり、
にんにく
※肉の黄なる花ちらちらと噎むせぶとき
おづおづ
怖々と投げいだし、眠りたる靈たましひの

人間の五官にもわきがたきいと深きかなしみ……
そのゆめはこころもち汗ばみて

傷つきし銀毛の耳に

痛き花粉は沁み、

やるせなき肉体の憂鬱に

柔かにかろく魘さるれど、

汝が母を犯したる

霊の不倫をば知るよしもなし。

五時過ぎて暮ちかき夏の日は

血に染みし呼鈴の声のごとくふりそそぎ、

嫺やかなる風は蜜蜂の褐色に、

蜜蜂のつぶやきは

かろく花粉を落す。

汝なが微かすかなる寢息は

腐れたる玉葱のほひにも沁しみ、

快こころよすく荒みゆく性せいの秘密にや笑ふらん。

匍はひよりし毛虫の奇異きいなる緑にも

汝なは覚さめず……

ひとみぎり園丁の鋏の刃はかなたに光り、

掘りかへさるる土の香の湿潤しめり吹き来る。

あはれ、かかる日に病みて伏す

やはらかにかなしき畜生の
 捉へがたき微温の、やるせなきそのこころ……

四十三年六月

隣人

隣人は露西亞の地主のごとく、

素朴な黒の上衣に赤木綿のバンドを占め、

長靴を穿き、

禿げた頭のきさくから他の畑を見回る。

隣人はよく蚕そらまめ、豆のなかに立ち、

雨に濡れた黄花※肉を眺める。
きのはなにんにく

// *Ogamadashi, Mauske、自慢らしい手つきで

啣くはえたパイプの雁首がんくびをぽんとはたく。

隣人は見え坊だ、そりばつてん、

どうかすると吝嗇しみつたれ漢だ、

世せかいくふさぎの気鬱ふさぎから、

馬鈴薯じゃがいもを食たべすぎた食傷もたれから。

隣人は女房を恐れる、長崎うまれの

肥満女ふとつちよの息の臭い、馬鹿力のある、
それでよく小娘のやうにかぢりつく、
牛肉ビーフと昼寝の好きな飲酒家のんだくれ。

隣人は日に一度黒い蒸気をながめる、

その悲しい面かほに泊芙藍さくらんのやうな

黄いろい日が光り、涙がながれる。

さうして悄然しほしほと御燈明みあかしをあげにゆく。

隣人の宣教師、混血児あひのこのベンさん

気まぐれな禿頭、

青い眼鏡をかけては街まちを歩ある行き、
日曜の日には御説教。

Changhang-deki no Mariya Sanna

Ne wa yasuka-batten,

utsukushikaken,

[Minasan yo_ogan de wokinasure.]

* お精がでます、茂助。

四十三年六月

雨の気まぐれ

雨はふる。……雨はふる……

やるせない しゅんきはつどうき 春機発動期の いろうつびやう 憂鬱病 …… かな 神経の哀しい衰弱……

黄色い胃病患者の腐つた気分^にふりそそぐ雨。

私通した こむすめ 小娘の青い悪阻^{つわり}の秘密と恐怖^にふりそそぐ雨。

のんだくれ 泥酔漢のおくびと、 ひとごろし 殺人の温^ぬるい計画^{たくらみ}とにふりそそぐ雨。

しとしとと、しとしとと、

絶間なく雨はふる、ふりそそぐ、にじむ、曳く、消ゆる、したた滴る。

わが暗い たましひりんうき 霊の霖雨季の長いひと月、

日^ひがな終日、 よ 昼も夜も、 をととひ 一昨日も、 きのふ 昨日も、 けふ 今日も

乱次だらしない雨はふる、ふりそそぐ、にじむ、曳く、消ゆる、滴したたる。

酸すつぱい麦酒ビールのやうな氣の抜けた雨。

いそぎんちやくの液しるのむづかゆい雨。

黴かびくさいインキいろの青い雨。

雨……雨……雨……

雨はふる……雨はふる……

酸敗すえかかつた橡とちの葉の纖維せんゐに蛞蝓なめくじの銀線ぎんせんを曳き、

臭くさい栗の花の白プラチナ金を腐らし、

鉄粉てつぶんのやうに光る芝生の土に沁み込み、

青い古池の面おもてに怪あやしい笑わらひを込らせ、

せうことなしに雨はふる、ふりそそぐ、何時までも何時までも小を

止^やみなく……

陰気な黴くさい雨、長い雨……日ぐらしの雨……

ともすると疲^{つか}れきつた悲^{かな}愁^{しみ}の裏^{うら}から

微^ほかな日光^{ひかり}の金^{きん}を投げかくる雨。

雨のふる廃^{はい}園^{えん}の木立^{こたて}の暗^{くら}い緑^{みどり}色の空^{そら}間^ま。

その洞^{ほら}のやうな葉^はかげの恐怖^{こわ}にふりそそぐ雨。……

折^ちから、ひよいと、花^{はな}やかに

地^ちより身^み軽^{かろ}なひるがへり、躍^{はな}り出したる怪^けのものが

突^{とつ}拍^ぱ子^しもないひと躍^{はな}り、……

Kappore! Kappore!

Amacha de Kappore!

Shiwocha de Kappore!

Yoito nai Yoi! Yoi!

緋のだんだらの尖帽せんぼうにおどけすがた戯姿だうけしの道化師が
 恐ろしきほど真白まっしろく白粉おしろいつけた呆とぼけがほ。

Oki …… no …… o …… o,

Kura …… ai …… no …… ni …… i, i,

Shira …… a …… Ho …… ga …… miyuru,

Are ... wa ... Ki no ... Ku ... u, u ... ni,

Hai! Yoito kono korewa no sai!

Ai ai ai ai ai ai

Mika n Bu u, u ne!

目も動かさず、白々と悪く澄ましたくはせ者、
はしや 燥ぎくるめく廉やすものの

蓄音機から絞しぼりだす囃はやし——黄色きいろな甲かんだか高たかの

三味しやみの笑わらひに挑いどまれて、

戯おどけつくした身のひねり、

突拍とつぺし子もないひと躍り……

Ichi kake, Ni kake, San kake te,

Shi kake te, Go kake te, Hasyo kake te,

Kawai Okata wo ……

ふいと消えたる変化へんげもの、

おしろい白粉この濃こい、

手の白しろい、

素足すあしの白しろい、

くちびるあか ちんもく唇くちびるの赤あかい沈黙ちんもく……

雨はふる……雨はふる……

陰気な黴かみくさい雨……長い雨……日ぐらしの雨……

気まぐれな不摂生ふせつせいのあとの痛ましい寂寥さびしみ、

イリユージョン

幻影えんげいの消え失せた雰囲気ふんゐきの暗い緑くろに、

むづ痒かゆいやうな、気の抜けた、さみしい、弱い、せうことなし
の

雨はふる……雨はふる……本能と神経の黄昏時たそがれどき。

しとしとと、しとしとと、

絶え間なく雨はふる、ふりそそぐ、葉から葉へ、しとと滴したたる。

深しんりよく緑くろの闇よるい夜——ふる雨の黒いかがやき、

廃すたれたる橡とちの葉たましひに古池ひねもすに霊ひるまの底けふの秘密きのふへ、

日ひねもすがな終日ひるま、昼間ひるまから、今日けふの朝あけから、昨日きのふから、遠い日の日の

夕ゆふべから、

ふりつづく長い長い憂鬱いろうつの单音律モノトニー、

その青い雨……黴かびくさい雨……投げやりの雨……

辛から気くさい静かな雨、かなしいやはらかな……生なまぬ温るい計たくらみ画の

雨。

雨……雨……雨……

葱の畑

寥さびしい靈たましひが鳴ないて居る。

四十三年六月

そここの湿しめつた黒くろい土つちのなかで

昼ひるの虫むしが

幽かすかな、銀ぎんの調子てうしで鳴ないてゐる。

疲つかれた日に光くわうが

五時半ごじはんごろの重おもい空気くうきと、

湯屋ゆやの曇くもり硝子がらすとに、

黄色きいろく濡ぬれて反射はんしゃし、

新あたらしい臭におひのなかに弱よわつてゆく。

寂さびしい靈たましひが鳴ないてゐる。

毛けなみのいい樺かばと白の犬が

交つるんだまま葱ねぎのなかにかくれてる。

眩まぶしさうに首だけ覗のぞいて

淀よどんだ瞳ひとみに

何なにもの物ものをか恐おそれてゐる。——

息いきがしづかに茎くきの尖頭さきを顛ふるはす。

何どこ処こかで百舌もずが鳴きしきる。

疲つかれた、それでも放ほ縦しいな

三さん十じふ過ぎた病びやう身しんの女をんならしい、

湯屋ゆやの硝子戸がらすどを出ると直ぐ

石鹼しゃぼんのしほひする身体からだをかがめて

嬰兒あかんぼに小便しっこをさしてゐる。

寥さびしい靈たましひが鳴いてゐる。……

母ははの眼めと嬰兒あかんぼの眼めが

一いちやう様に白しろい犬いぬの耳みみに注そそがれる。

可愛かあいいちんぽこから小便しっこが出る。

その尿ねうと、濡ぬれた西洋手拭タヲルと、束髪そくはつと、

無意味むいみな眼めつきと、白ねぎつぽい葱あをの青あをみに、

しみじみと黄色きいろな光ひかりがうつる。

しだいに反射はんしゃがうすれて

外ぐわい光くわうが青あをみを帯おびた。

煙えんとつ突とつから薄うすい煙けぶりがたなびき

畑はたけ々くの葱ねぎの尖頭さきには

銀色ぎんいろの露つゆが光ひかつてくる。

そしてなほ、湿しめつた黒くろい土つちのなかでは

寥さびしい虫むしが、

幽かすかな昼ひるの調子てうしで鳴ないてゐる。

寂しい寂しい寂しい畑。

四十三年一月

八月のあひびき

八月の傾斜面スロップに、

美しくきんしき金の光はすすり泣けり。

こほろぎもすすりなけり。

雑草の緑みどりもともにすすり泣けり。

わがこころの傾斜面スロップに、

滑りつつ君のうれひはすすり泣けり。

よろこびもすすり泣けり。

悪縁あくゑんのふかき恐怖おそれもすすり泣けり。

八月の傾斜面スロウプに、

美しくしき金きんの光はすすり泣けり。

秋

日曜の朝、「秋」は銀かな具ぐの細巻の

四十三年八月

絹薄き黒の蝙蝠傘かうもりさしてゆく、

紺の背広に夏帽子、

黒の蝙蝠傘かうもりさしてゆく、

潇洒にわかき姿かな。「秋」はカフスも新らしく
カラも真白につつましくひとりさみしく歩み来ぬ。

波うちぎはを東京の若紳士めく靴のさき。

午前十時の日の光海のおもてに広重ひろしげの

藍を燻いぶして、虫のごと白金プラチナのごと閃めけり。

かろく冷つめたき微風そよかぜも鹹しほをふくみて薄青し、

「秋」は流行はやりの細巻の

黒の蝙蝠傘さしてゆく。

日曜の朝、「秋」は匂ひも新らしく

新聞紙折り、さはやかに衣囊かぶしに入れて歩みゆく、

寄せてくづるる波がしら、濡れてつぶやく銀砂の、
靴の爪さき、足のさき、パツチパツチと虫も鳴く。

「秋」は流行はやりの細巻の

黒の蝙蝠傘さしてゆく。

四十四年十月

槍持

おかる勘平

おかるは泣いてゐる。

長い薄うすあかり明のなかでびろうど葵の顫へてゐるやうに、

やはらかなふらんねるの手ざはりのやうに、

きんぼうげ色の草生くさぶから昼の光が消えかかるやうに、

ふわふわと飛んでゆくたんぽぽの穂のやうに。

泣いても泣いても涙は尽きぬ、

勘平さんが死んだ、勘平さんが死んだ、

わかい奇麗な勘平さんが腹切つた……

おかるはうらわかい男のにほひを忍んで泣く、

翹かうじむろ室

に玉葱の咽むせるやうな強い刺戟しげきだつたと思ふ。

やはらかな肌はだざはりが五月ごごわつごろの外ぐわいくわう光のやうだつた、

紅茶のやうに熱ほてつた男の息いき、

抱擁だきしめられた時とき、昼間ひるまの塩えんでん田えんでんが青く光り、

白い芹の花の神経が、鋭くなつて真蒼に凋れた、

別れた日には男の白い手に烟えんせう硝のしめりが沁み込んでゐた、

駕にのる前まで私はしみじみと新しい野菜を切つてゐた……

その勘平は死んだ。

おかるは温室おんしつのなかの孤児みなしごのやうに、
 いろんな官能くわんのうの記憶にそそのかされて、
 楽しい自身の愉楽ゆうらくに耽つてゐる。

(人形芝居にんぎやうしばゐの硝子越しに、あかい柑子の実が秋の夕日にかが
 やき、黄色く霞んだ市街しがいの底から河蒸氣の笛がきこゆる。)
 おかるは泣いてゐる。

美しくしい身振みぶりの、身も世もないといふやうな、
 せま迫せまつた三味しやみに連れられて、

チヨボの佐和利さはりに乗つて、
泣いて泣いて溺れ死おほにでもするやうに
おかるは泣いてゐる。

(色にほひと匂と音楽と。)

勘平なんかどうでもいい。))

四十二年十月

雪の日

淡うすあを青い雪は

冷めたい硝子戸のそとに。
……

紫の御召おめしをひきかけた

浜勇は

東の棧敷に。

薄い襟あしの白粉おしろいも見よきほどに

こころもち斜なぐめに坐つて。

うつむき加減かげんにした横顔の

淡青い雪の反射。

静かに曳かれてゆく幕そとの、

立三味線、

仁木の青い目ばりの凄さ。

暮れかかる東京のそらには

ほんのりと瓦斯が点^つき

淡青い雪がふる。

半玉は冷^つめたい指をそろへて、

引^{ひきこみ}込^{つら}の面あかりをながめ、

なにかしらさみしさうに。

淡青い雪は

冷めたい硝子戸のそとに。

幽かな音、幽かな色、幽かなささやき……

四十三年七月

種蒔き

パツチパツチと鳴く虫の

昼のさびしさ、つつましき、……

葱の畑のそこに銀の懐中時計とけいを閉しめる音。

けふも彼岸ひがんのあかるさに、

誰に見しよとか、権兵衛は

青い手拭、頬かぶり、

梔こわきを小腋こわきに、ひえびえと畝うねのしめりを踏んでゆく。

畝うねの光に蒔く種は

かなしみの種、性せいの種、黒稗くろひえの種。

パッチパッチと鳴く虫の

昼のさびしさ、しをらしさ、……

強い日射ひざしのそこここに若いころの咽むせぶ音。

ほんに一日齷齪いちにちあくせくと

歎き足らひで、権兵衛が

青いパツチに繩なはの帯、

及び腰してひとすぢに土にほひの臭かを嗅いでゆく

午後ごごの光に蒔く種は

かなしみの種せい、性せいの種、黒稗くろひえの種。

パツチパツチと鳴く虫の

昼からすくちばしのさびしさ、なつかしさ。……

黒い鴉からすくちばしの嘴くちばしに種くちばしのつぶれてなげく音。

若い身そらの内密事ないしよごと、

ひとり苦くに病やむ権兵衛が、

歩みののろさ、手の痛いたさ、

腰いたの痛みにしみじみと明あかき其夜を泣いてゆく。

銀ぎんの秘密ひみつに蒔まく種は

かなしみの種、性せいの種、黒くろ稗ひえの種。

パッチパッチと鳴く虫の

昼のさびしさやるせなさ。……

常に啄つまれて生れ得ぬ種の、嬰あかご児の、なげく音。

妻も子もない 醜男ぶをとこの

何時いつも吝嗇つましい権兵衛が

貧ひんの盗みか、一ひとか擁え

葱を伏せつつ、怖々こは／＼と畝うねの凸たかみを凝視みつめゆく、

伏せたところに蒔く種は

かなしみの種、性せいの種、黒稗くろひえの種。

パッチパッチと鳴く虫の

昼のさびしさおそろしさ。……

黒い眼玉が背後うしろからちつと睨んで歩む音。

欲よくのつかれか、冷汗ひやあせか、

金うなが唸うなれば権兵衛の

野暮やぼな胸むねさへしみじみと、

金きんの入い日の凌雲閣じふにかいいた傷いたみながらに蒔まいてゆく。

けふの恐怖おそれに蒔まく種こは

かなしみの種せい、性せいの種こ、黒稗くろひえの種こ。

パツチパツチと鳴く虫の

昼なのさびしさ、情なさけなさ。……

黒からすい鴉からすにつぶされて種すべての凡きの滅きゆる音。

忠弥

雪はちらちらふりしきる。

城の御濠おほりの深みどり、

雪を吸ひ込む舌うちの

しんしんと沁しむたそがれに、

鴨の気弱きよわがかきみだす

水の表面うはべのささにごり

四十三年十月

知るや知らずや、それとなく

小石投げつけ、——

ひつそりと底のふかさをききすます
わかき忠弥か、わがおもひ。

君が秘密の日くれどき、

ひとり心につきつめて

そつとさぐりを投げつくる

深き恐怖^{おそれ}か、わが涙——

千万無量の瞬間^{たまゆら}に

雪はちらちらふりしきる。

四十五年十一月

歌うたひ

悲しいけれどもわしや男、
いやでもお酒をさがしませう、
赤いセエリイもないならば
飲んだふりして就寝やすみませう。
みすぎ世すぎの歌うたひ。

槍持

四十三年十一月

槍は鏽さびても名は鏽さびぬ、
殿とのにつきそふ槍持の槍の穂尖ほさきの悲しさよ。

槍は槍持、 供ともぞろへ揃、

さつと振れ、 振れ、 白鳥毛。

けふも馬上の寛くわんくわつ潤つに、

殿は伊達者だてしやの美よい男、

三國一の備後様、

しんととろりと見とれる殿御とのご。

槍は槍持、銀なんぼ。

供ともやつこの奴さへこのやうに、あれわいさの、これわいさの、取りはづす、

やあれ、やれ、危あぶなしやの、槍のさき。

槍は鏽びても名は鏽びぬ、

殿のお微行しのび、近習きんじゆまで

身なりくづした華美はでづくし、

槍は九尺の銀なんぼ、

けふも酒、酒、明日あすもまた、

通ふしだらの浮気うはきづら、

わたる日本橋ちらちらと雪はふるふる、日は暮れる、
 やあれ、やれ冷^{つめ}たしやの、槍のさき。

槍は槍持、供ぞろへ、

さつと振れ、振れ、白鳥毛。

雪はふれども、ちらほらと

河岸^{かし}の間屋の灯^ひが見ゆる、

さてもなつかし飛ぶ^{かもめ}鷗、

壁のしたには広^{ひろ}重^{しげ}の紺のぼかしの裾模様、

殿の御容量^{ごきりやう}に、ほれぼれと

わたる日本橋、槍のさき、

槍は担かつげど、空うはのそら、渋しふめん面めんつくれど 供とも奴やつこ、

ぴんとはねたる附つけ髭ひげに、雪はふるふる、日は暮れる。

やあれ、やれ、やるせなの、槍のさき。

槍は槍持、供ぞろへ、

さつと振れ、振れ、白鳥毛。

槍は鏽さびびても名は鏽さびびぬ。

殿につきそふ槍持の槍の穂さきの悲しさよ。

いつも馬上の寛潤に、

殿は伊達者のよい男、

さぞや世間せけんの取沙汰に

浮かれ騒ぐも女なら。

そこらあたりの道すぢの紺のれんの暖簾も気がかりな。

槍は九尺の銀なんぼ、

槍を持つ身のしみじみと、涙流すもつとめ故、

さりとは、さりとは、ともやつこ供奴、

雪はふるふる、日は暮れる。

やあれ、やれ、しよんがいなの、槍のさき。

四十五年三月

CHONKINA.

Chonkina! chonkina!

Chon-chon kina-kina!

Chon ga nanoso de,

Cho-chon ga yoi! ……

「あか ゆふひ、
赤い夕日、くわつどうしやしんみ
活動写真見たいなキラキラが、あのやうに、あれ、御覧な。むかさんがい
お向ふの三層楼の
高い部屋の障子に、
何時までも何時までも照
りつける辛気くささ、

寝^ねまきや、長^{なが}襦^{じゆ}袷^{ばん}の、

如何^{どう}したんだらうねえ、まあ、

両^{りやう}肌^{はだ}なんか脱^ぬいだりさ、

欄^{てすり}干^{こし}に腰^{こし}かけたり、跨^{また}いだり、

自^じ墮^だ落^{らく}な、あれさ、落^{おつ}こつたらどうするの、

気^きまぐれも大^{たい}概^{がい}になさいなね、

あれ、あの手^ても真^ま赤^{つか}な狐^{きつ}拳^{ねけん}！」

≪Chon-aiko! chon-aiko! ……≫

「華^{おいらん}魁^{けい}、ちよいと、御^ご覧^{らん}なさいな、

しき^{しき}ぶり^{ぶり}で裏門^{うらもん}が開いたと思つたら、
おも

たい^{たい}へん^{へん}で大変ですわねえ、あれ、あんなに水^{みづ}が、

ずる^{ずる}ぶん^{ぶん}随分^{ずぶん}しどい^{しどい}音^{おと}だこと、

どて^{どて}堤^{とて}をもう越^こしたんですとさ。

りゆう^{りゆう}せん^{せん}じ^じ竜泉寺^{りゅうせんじ}、山谷^{さんや}、今戸^{いまど}のわたし、

そりやもう大^{たい}変^{へん}な騒^{さわ}ぎ^ぎよ、

おやおや、まあ、素^すつ裸^{ばだか}で、

あげ^{あげ}やまち^{やまち}の通^{とほり}を伝馬^{てんま}担^{かつ}いで奔^{はし}るなんて

ぎん^{ぎん}銀ちやん、威^ゐ勢^{せい}がよいことねえ。」

≪Chon-aiko! chon-aiko! ……≫

「華魁おいらん、何をなにそんなに見みてお出いでなの、

くよくよとさ、

黄色きいろいふたつの高張たかはりに

赤あかい日ひが、あのやうに射さしかけて、

ぴちやぴちやと濁にごりみづ水すいが凄すごいわねえ、

あら、ちよいと、そんな処ところで

おちんこなんか捲まくるもんぢやありませんつたら、

小兒こどもは罪つみが無ないことねえ、ほほほ。まあ。」

Chonkina! chonkina!

Chon-chon, kina-kina,

Chon ga nanoso de,

Cho-chon ga yoi,

Aiko de yoi,……

Chon-aiko! chon-aiko ……

よしはら ちうみせ
吉原の 中店の

しよくこもんど
お職「小主水」とて、うれかほ
愁ひ顔の 寥しい、さみ

どうしたことやら、

おしろい
白粉もまだつけぬ あを
青いろの、

なつかしい め
眼つきの をんな
女の、

つか
疲れたやうに、
しんぞう ふたり
新造と二人、
あゐいろ
藍色の薄うすいネルを着きながして

——ひとりは立膝——

おいらん
華魁は灯ひのつかぬ五時ごじごろの

うすぐら
薄暗い角店かどみせの二重にぢゆうに腰こしかけて、

なに
何とやら澄すまぬ顔かほ、

ひだりひと
左の人ゆびさし指うすの薄ほうい繻たい帯に

きん
金うしろいろの背ついたて後の附立が、

しなほり
支那彫からしの唐獅子の、

つめ
冷ひかりたい光なを投なげかくる。

そのさだまらぬ陰影かげのかげの

そのなかの幽かすかなためいき……

“Chonkina! Chonkina! ……”

格子戸かうしどご越しに、赤あかい日ひが

高たかい屋や並なみの不思議ふしぎな廂ひさしにてりかへし、

洪こうすゐ水みづの音おとがきこえる。

欄干てすりでは何時いつまでも何時いつまでも

気きまぐれな狐きつね拳けん。

Chon-aiko! chon-aiko,

Chon-chon aiko-aiko,

Chon ga nanoso de

Cho-chon ga yoi ……

“Chonkina! chonkina! ……”

四十三年七月

鬼百合

夏の日の東京に

歌うた沢ざのはこころいき……

しみじみと身にしみて

きく年増としま、

すらりとした立姿たちすがたの

中形の薄青さ、

それしやの粹いなこころに。

日がそそぐ……銀色ぎんいろのきりぎりす

浮気男うはきをとこを殺した

昼寝ひるねの夢の凄さ、

たてひきの憎にくさ、

かなしき、つらさ、くるしき、

日がそそぐ……わかいお七の半鐘か、死ぬるきりぎりすか。
 銀ぎんの光の細かな強いすすりなき。

おほかは
 大河をまへに、

唇くちくはに啣くはえた帯留きんの金――

手をうしろにまはして、

暑あつさうなものごしの、

なにかしら寂さみしさうに、

きりきりと締め直す黒い繻しゆす子のひとすぢ一筋。

けだるげな三味線が

あれ、またもあのやうに、……

青みもつ目のふちの疲れつかから

なにを見るとなし熟視みむる

黒い瞳の深さ、

酸すいも甘いも噛みわけた

ちゆうねん
中年シヨツクの激しい衝動……その底のさみしさ、
つらさ、かなし

さ。

黒い繻子の手ぎはりが

きゆつ、きゆつと……

暑い、苦しい、くるしい日、

渋い鬼百合の赤さ、

あざやにほひ鮮かな臭の強さ、

しめかちいろ湿つた褐色の花粉の

こまうしろ細かにちる……背後の床の間まの大輪たいりん。

さは触る帯の繻子、やはらかな粉こな、

こころもきゆつきゆつと……

夏の日のさる河岸に

歌沢のこころいき。

ええまあ、

奈何^{どう}すりや宜^いいつてんだらうねえ。

道化もの

ふうらりふらりと出て来るは

ルナアパークの道化^{だうけ}もの、

四十三年七月

服は白茶しらちやのだぶだぶと戯おどけ澄ました身のまわり、
 あつち向いちやふうらふら、
 こつち向いちやふうらふら、
 緋房のついた尖とんがり帽子がしをらしや。

鉛おしろいまつしろ粉真白まるけで丸ふたつ

頬ほべに紅さいたるおどけづら、

円まるい眼まぼりもくるくると今日けふも呆とほけた宙がへり。

かなしやメエリイゴラウンド、

さみしや手品の皿まわし、

春の入日の沈ちんちやうげ丁花がどこやらに。

ひとが笑へばにやにやと、

猫のなきまね、鳥啼き、

たまにやべそかき赤い舌、嘘か、色眼いろめか、涙顔。

鳴いそな鳴いそ春の鳥、

鳴いそな鳴いそ春の鳥、

紙の桜もちらちらとちりかかる。

薄むらさきアークとうの円弧燈、

瓦斯と雪洞ほんぼり、鶴のむれ、

石油のエンヂンことごとと水は山から逆さかおとし、

台湾館の支那の児

足の小さな支那の児、

しよんぼり立つたうしろから馬鹿ばか囃子ばやし。

ぬうらりしやらりと日が暮れて

またも夜よとなる、道化もの、

あかい三角帽をちよいと投げてひよいと受けたら 禿はげ頭あたま。

あつち向いちやくうるくる、

こつち向いちやくうるくる、

御愛嬌ごあいきやうか、またしてもとんぼがへり。

四十四年三月

あそびめ

たはれをのかずのまにまに
じだらくにみをもちくづし、
おしろいをあをきひたひに
ねそべりてひるもさけのみ、
さめざめとときになみだし、
ゆふかけてさやぎいづとも、
かなしみはいよよおろかに、
あはれよのしろきねどこの

ながねがひいよよつめたし。

まくらべのベコニヤのはな。

四十五年五月

南京さん

李^{レイ}さん、鄭さん、支那服さん、

あなたの眼鏡はなぜ光る、

涙がにじんで日に光る。

鳥屋の硝子も日に光る。

目白、カナリヤ、四十雀、

鶉に文鳥に黒鶉^{くろつぐみ}、

鳥もいろいろあるなかに
おかめいんこ鸚哥はおどけもの
焦ぢれて頓狂に啼きさけぶ。
さてもいとしや、しをらしや、
けふも入日があかあかと
わかいナンキン南京さんは涙顔。

蝮捕り

旅のすがたの蝮まむし捕り。

四十四年十月

紺の脚絆に紺の足袋、

紺の小手あて、めくらじま盲縞。

羽織、腹掛しやんとして草鞋つつかけ忍びあし。

わかい男の忍びあし、

まがひパナマに日が射せば、

苦にがみばしつた横顔のことにつやつや蒼白く、

ほそく割さいたる青竹に蝮挟さみてなつかしく、

渚のほとり、草土手の曼珠沙華さくしたみちを、

九月ひるすぎ午後、忍びあし。

静かにゆるき潮しほなり鳴は、

夏と秋との伴ともあはせ奏、

五十三次、ひろしげ広重の海の匂もまだ熱く、

眉にかがやく忍びあし、……

蝮の腹もいと青く。

けふのこの日の蝮捕り、——

渡りあるきの生なりはひ業きのふの昨日つかの疲れ、

明日しゆびの首尾、

案じわづらふ足もとに飛んで跳はねたはきりぎりす。

疲れた三味が鳴るわいな。

意気な年増の手ずさみか、

取り残された避暑客の後の一人の爪弾か、

離縁さられた人か、死ぬ人か、

思ひなしかは知らねども、

昨日あがつた心中の男をそこをんな女の忍び泣き、
……

あれ三味が鳴る、昼日なか、

知らぬ都のふしまはし。

わかい吐息の忍びあし、

そつと留とどめて、聞惚れて、なにをおもふや、うつとりと、

蝮の腹の青縞の博多帯めくつやややかさ、

きゆつきゆと白き指つけて、拭ふきつ、さすりつ、薄笑みつ、

九月、午後、日の光——

こころの縞もいと青く。

蝮よ、蝮よ、やはらかな、熱あつい冷つめたい手触てさはりの、

そなたも三味にきき惚ほれて身をうねらすや、やるせなく、……

平首ひらくび、竹に挟まれて、されどゆかしく、あどけなく、

無心みはに瞳る眼のいろは空と海との水あさぎ。

蝮よ小さい尾のさきの、匂の肌をつまぐれば、

毒ある汗はいきいきと、神経のごと細こまやかに、

朱の斑ふなまめくくりと黄きの波斯ペルシヤ模様の美しくしき、
 それか、怪たはしき淫めれ女の
 閨ねやの麝じやかう香の息づかひ。

九月ひるすぎ午後、日光——

あれ三味が鳴る、きりぎりす、
 飛んで死んだがましきいな。

四十四年九月

雪と花火

夜ふる雪

蛇じやのめ目の傘かさにふる雪ゆきは

むらさきうすくふりしきる。

空そらを仰あふげば松まつの葉はに

忍しのびがへしにふりしきる。

酒さけに酔ようたる足あしもとの

薄うすい光ひかりにふりしきる。

拍子木ひやうしぎをうつはね幕まくの
遠とほいころにふりしきる。

思おもひなしかは知らねども
見みえぬあなたもふりしきる。

河岸かしの夜よふけにふる雪ゆきは
蛇じや目の傘かさにふりしきる。

水みづの面おもてにその陰影かげに

むらさきき薄うすくふりしきる。

酒さけに酔ようたる足もとの
弱よわい涙なみだにふりしきる。

声こゑもせぬ夜よのくらやみを
ひとり通とほればふりしきる。

思ひなしかはしらねども
こころ細かにふりしきる。

蛇じや目の傘にふる雪は

むらさき薄くふりしきる。

柳の佐和利

ほの青あをい雪ゆきのふる夜よに、

電でん車しゃみちを、

酔よつて、酔よつて、酔よつぱらつてさ、ひよろひよると、

ふらふらと、凭もたれかかれば、硝がらす子すど戸どに。

[Yo_i! …… Yo_i! …… Yo_itonai ……]

ほの青い雪はふり、

店のなかではしんみりと柳の佐和利、

酔つて、酔つて、酔つぱらつてさ、ふらふらと、

ひよろひよると首をふれば太棹が……

[Yo_i! …… Yo_i! …… Yo_itonai! ……]

ほの青い雪の夜

蓄音機とは知つたれど、きけばこの身が泣かるる。

酔つて酔つて酔つぱらつてさ、ひよろひよると、

ふらふらと投げてかかれれば、その咽喉が……

[Yo_i! …… Yo_i! …… Yo_itonai! ……]

ほの青い雪あを ゆきのふる

人ひとひとり通とほらぬこの雪ゆきに、まあ何なんとした、

酔よつて酔よつて酔よつぱらつてさ、ふらふらと、

ひよろひよると、しやくりあぐれば誰たれやらが、

[Yo_i! …… Yo_i! …… Yo_itonai ……]

四十四年一月

春の鳥

鳴きそな鳴きそ春の鳥、

昇菊の紺と銀との肩ぎぬに。

鳴きそな鳴きそ春の鳥、

うたぎは
歌 沢の夏のあはれとなりぬべき

大川の金と青とのたそがれに。

鳴きそな鳴きそ春の鳥。

かるい背広を

かるい背広を身につけて、

こよひ
今宵またゆく都川、

四十三年四月

恋か、ねたみか、吊橋の
瓦斯の薄黄うすぎが気にかかる。

薄あかり

銀ぎんの時計のつめたさは
薄うすらあかりのVIIしちの字に、
君がこころのつめたさは
河岸かしの月夜の薄あかり。

四十三年七月

薄いなさけにひかされて、けふもほのかに來は來たが、
心あがりのした男、何のわたしに縁がある。

空の光のさみしきは

薄らあかりのねこやなぎ、

歩むこころのさみしきは

雪と瓦斯との薄あかり。

思ひ切らうか、切るまいか、そつと歸るか、何とせう。
いつそあの日のくちつけを後の^{のち}ゆかりに別れよか。

水のにほひのゆかしさは

薄らあかりの鴨の羽、

三味のねじめのゆかしさは

遠い杵屋の薄あかり。

かるい背広を身につけてじつと凝視^{みつ}むる薄あかり。

薄い涙につまされて、けふもほのかに来は来たが。

銀の時計のつめたさは

薄らあかりのⅦの字に、

君がこころのつめたさは

青い月夜の薄あかり。

恋か、りんきか、知らねども、ほんに未練な薄あかり。

思ひ切らうか、たづねよか、ええ何とせう、しよんがいな。

四十三年三月

金と青との

金と青との愁夜曲、
ノクチユルヌ

春と夏との二声楽、
ドウエツト

わかい東京に江戸の唄、

陰影かげと光のわがこころ。

四十三年五月

雨あがり

やはらかい銀の毬ぼやぼや花の、ねこやなぎのほふやうな、

その湿しめつた水路すゐろに单艇ボートはゆき、

書割かきわりのやうな杵屋きねやの

裏うらの木橋に、

紺じやのめの蛇目傘をつぼめた、

つつましい素足のさきの爪つまか革はのつや、

薄青いセルをきた筵若の
それしやらしいたたずみ……

ほんに、ほんに、

黄いろい柳の花粉のついた指で、

ちよいと今こんばん晩は、

なにを弾かうつていふの。

水盤

そなたの移した水すゐばん盤に、

四十三年七月

薄い硝子の水の

微かな光、

新内のながしも通るのに、
ほんとに睡ちやつたの。

そなたの冷めたい手は

わたしの胸に、

薄いセルは

微かな涙に、

ほんとに睡ちやつたの。

そなたの寢息は

桐の花のやうに、

やるせないところをそそのかし、

捉とらへかぬる微かすかな光。

ほんとに睡ねちやつたの。

そなたのけふ入れた緋鮒ひぶなか、

それとも陶器やきものの金魚かしら、

なにかしら寂さみしい力ちからの

薄い硝子さしに触さはるやうな……

ほんとに睡ねちやつたの。

そなたの知つてる男は

みんな薄情ものだ。

さうしてそなたが眠ねむつてから

何時でもこんな風にささやく、

ほんとに睡ねちやつたの。

四十三年七月

心中

あはれなる心中のうはさより

わがたま霊は泣き濡れてかへりゆく、

花つけしアカシヤの並木のかげを、
 嫋なよやかなる七月のおとづれのごとく。

やすらかに平準ならされしところは

あるものの抑圧おさへのかげにありて、

つねにかかる微顫ふるへをこそぞみたれ。

いみじく幽かなるそのLied 《リイド》よ。

つきやすき花くわふん粉のしめりのごとく、

そはまた暈まぶたの汗のごとくに顫ふるへやすし。

護謨輪ごむわのゆけばためらひ、

吊橋の淡黄うすきなる瓦斯がすのもとを泣きゆく。

新道しんみちを抜ぬけては

榊の芽のむせびをあはれみ、

御神燈のかけをば

それしやの浴衣ゆかたともすれちがふ。

とある河岸かしのおでんやには

寄席よせのビラのかなしく、

薄汗うすあせの光る紙に

水菓子の色透くがいとほし。

あはれなる心中のうはさより

わが^{たま}霊は泣き濡れてかへりゆく、

微風^{そよかぜ}の吹くままに過ぎゆく

嬾^{なよ}やかなる七月のおとづれのごとく。

四十三年七月

花火

花火があがる、

銀^{ぎん}と緑の孔雀^{くじやくだま}玉……パツとしだれてちりかかる。

紺青の夜の薄あかり、

ほんにゆかしい歌麿の舟のけしきにちりかかる。

花火が消ゆる。

薄紫の孔雀玉……あか紅くとろけてちりかかる。

Toron …… tonton …… Toron …… tonton ……

色とにほひがちりかかる。

両国橋の水と空とにちりかかる。

花火があがる。

薄い光と汐風に、

義理と情の孔雀玉……なさけくじやくだま涙しとしとちりかかる。

涙しとしと爪つま弾びきの歌のこころにちりかかる。

団扇片手のうしろつきつんと澄ませど、あのやうに
舟のへさきにちりかかる。

花火があがる、

銀ぎんと緑みどりの孔雀玉……パツとかなしくちりかかる。

紺こん青じやうの夜に、大河に、

夏の帽子にちりかかる。

アイスクリームひえびえとふくむ手つきにちりかかる。

わかいこころの孔雀玉くじやくだま、

ええなんとせう、消えかかる。

四十四年六月

放埒

放埒はうちつのかなしみは

ひらき尽くせしかはたれの花の

いろの、にほひの、ちらんとし、ちりも了らぬあはひとか。

かかる日の薄明はくめいに、

しどけなき恐怖おそれより蛍ちらつき、

女の皮膚ひふにシヤンペンの香にほひからめば、

そは支那の留学生もなげくべき

尺八の古き調子のこころなり。

うら若き芸妓には二上りのやるせなく、

中年の心には三の糸下げて弾くこそ、

下げて弾くこそわりなけれ。

かくて、日のありなし雲の雨となり、

そそぐ夜にこそ。

おしろい花のさくほとり、しんねこの幽かなる

音を泣くべけれ。

放埒はうらつのかなしみは

ひらきつ尽くせしかはたれの花の

いろの、にほひの、ちらんとし、ちりも了らぬあはひとか。

四十三年八月

紫陽花

かはたれに紫陽花あぢさゐの見ゆるこそさみしけれ。

うらわかき盲まうじん人のいろ飽あくまで白く、

そのほとりに頬よを寄するは——

かるくかさねし手のひらの弾く爪さき、それとなく
りゆうたつ隆達ぶしの唱歌など思ひ出づるはいとかなし。

誰かつくりし恋のみち、いかなる人も踏み迷ふ……

よしやわれにも情なさけあれ。寮の日くれの、あ、もの憂うや、

なん何とせうぞの。かなかなきん。蝸の金の線はりがねふる。条顛はす声も、

えん縁さへあらばまたの夕日にチレチレ

またの夕日に時しぐ雨るる。

おはぐろどぶのかなしみは

ぎさふちやうちん岐阜堤燈のかげうつる茶屋のうしろのながし湯の

石鹼しやほんのほひ、かび 黴の花、青いとんぼの眼めの光。

よひやみの、よひやみの、

いづこにか、赤い花火があがるよの、

音おとはすれども、そのゆめは

見えぬころにくづる……

ほのかにも紫陽花あぢさゐのはな咲けば、

あらた 新あたらにかけし撒水うちみづの

香かのうつりゆくしたたり、

さて、消えやらぬ間の片恋。

四十三年八月

カナリヤ

たつたひとこと一言きかしてくれ。

カナリヤよ、

たんぽぽいろのカナリヤよ、

ちろちろと飛びまはる、ほんに浮気なカナリヤよ。

おしやべりのカナリヤよ。

たつたひとこと一言きかしてくれ、

ちやうど丁度、弾きすてた歌沢の、

三の絃いとの消ゆるやうに、

「わたしはあなたを思つてる。」と。

彼岸花

憎い男の心臓を

針で突かうとした女、

それは何時いつかのたはむれ。

昼寝のあとに、

ハツとして、

けふも驚くわが疲れ。

憎い男の心臓を

針で突かうとした女、——

もしや棄てたら、キツとまた。

どうせ、しめぢ湿地の

彼岸花、

蛇がからめば

身は細ほそる。

赤い、しめぢ湿地の

彼岸花、

午後の三時の鐘が鳴る。

四十四年十一月

もしやさうでは

もしやさうではあるまいかと

思うても見たが、

なんの、そなたがさうである、

このやうなやくざにと、——

胸のそこから血の出るやうな
知らぬいつはり偽いつはりいうて見た。

雪のふる日に

赤い酒をも棄てて見た。

知らぬふりして、

ちんからと

鳴らしたその手でさかづきを。

片足

四十四年十一月

花が黄色で、芽がしよぼしよぼで、

見るも汚きたない梅の木に

小鳥とまつて鳴くことに、——

あれ、あの雪の麦畑むぎぼたの、つもつた雪のその中に、

白い女の片足が指のさきだけ見えて居る。

はつと思つて佇めば、

小鳥逃げつつ鳴くことに、——

何時いつか憎いと思うたくせに、

卑怯未練な、安心さしやれ、

あれは誰かの情婦いろでもなけりや、

女乞食の児でもない。

一軒となりのもくよむ杵右衛門どんの

唾の娘が投げすてた白い人形の片足ぢや。

あらせいとう

人知れず袖に涙のかかるとき、

かかるとき、

ついで見馴れぬよその子が

四十四年十二月

あらせいとうのたねを取る。

丁度誰かの為^するやうに

ひとり泣いてはたねを取る。

あかあかと空に夕日の消ゆるとき、

植物園に消ゆるとき。

四十三年十月

あかい夕日に

あかい夕日につまされて、

酔うて珈^{カツフエ}琲店を出は出たが、

どうせわたしはなまけもの
明日あすの墓場をなんで知ろ。

四十三年十月

銀座の雨

銀座の雨

雨……雨……雨……

雨は銀座に新らしく

しみじみとふる、さくさくと、

かたい林檎の香のごとく、

しきいし舗石の上、雪の上。

黒の山高帽、やまたか 獵虎の毛皮、ラッコ

わかい紳士は濡れてゆく。

蝙蝠傘かうもりの小さい老婦も濡れてゆく。

……黒の喪服と羽帽子はねぼうし。

好すいた娘の蛇目傘じやのめがさ。

しみじみとふる、さくさくと、

雨は林檎の香のごとく。

はだか柳に銀緑ぎんりよくの

冬の瓦斯点つくしほらしき、

棚の硝子にふかぶかと白い毛物の春支度。

肺病の子が肩掛の

弱いためいき。

ペルシヤ
波斯の絨氈、

洋書の金字は時雨の靈、

[Henri 《アンリイ》 De 《ド》 Re'gnier 《レニエ》] が曇り玉、

息ふきかけてひえびえと

雨は接吻きつすのしのびあし、

さても緑の、宝石の、時計、磁石のわびごころ、

わかいロテイのものおもひ。

絶えず顫へていそしめる

お菊夫人の縫針ぬいばりの、人形ミシンのさざめごと。

雪の青さに片肌ぬぎの

たばもつやめく髪かたの型、つんとすねたり、かもじ屋に

紺は匂ひて新らしく。

白いピエロの涙顔。

熊とおもちやの長靴は

児供ごころにあこがるる

サンタクロスの贈り物。

外はしとしとうすゆき淡雪に

沁みて悲しむ雨の糸。

雨は林檎の香のごとく

しみじみとふる、さくさくと、

扉ドアを透かしてふる雨は

Verlaine 《ヴェルレレイヌ》の涙雨、

赤いコツプに線すぢを引く、

ひとり顫へてふりかくる

辛い胡椒からに線すぢを引く、

されば声出す針さきの尖、蓄音器屋にチカチカと

廻るかなしき、ふる雨に

酒屋の左和利、三勝もそつと立ちぎく忍び泣き。

それもそうかえ淡雪うすゆきの

光るさみしき、うす青さ、

白いシヨウルを巻きつけて

鳥も鳥屋に涙する。

椅子も椅子屋にしよんぼりと
白く寂しく涙する。

猫もしよんぼり涙する。

人こそ知らね、アカシヤの
性の木の芽も涙する。

雨……雨……雨……

雨は林檎の香のごとく

冬の銀座に、わがむねに、

しみじみとふる、さくさくと。

四十四年十二月

雪

雪でも降りさうな空あひだね、今夜も

ほら、もう降つて来たやうだ、その薄い色硝子を透かして御覧。

なつかしいアークとう円弧燈に真白なあ羽虫のたかるやうに

こま細かなセンジユアルな悲しみが、向ふの空にも、

橋にも柳にも、

水面にも、

書割のやうな遠見の、黄色い市街の燈にも、

多分冷たくちらついてゐる筈だ。それとも積つたかしら。

幽かな囁き……幽かなミシンの針の

薄い紫の生絹きぎぬを縫ふて刻むやうな、

いろつや色 沢のある寂しいリズムの閃めきが、

そなたの耳にはきこえないのか……湯から上つて、
もう一度透かして御覧、乳房が硝子に慄へるまで。

曇つたのぼせさうな湯殿に、

白い湯気のなかに、

蛍が飛ぶ……燐のほひの蛍が、

ほうつほうつと……あれ銀杏がへしの

つんと張つた鬢のうらから

肩から、タオルからすべつて消える。

ほうつほうつと。

さうではない、さうではない、

すらりとした両つふたのほそい腕から、

手の指の綺麗な爪さきの線まで、

何かしら石シヤボン 齧かが光つて見えるのだ、さうして

魔気まきのふかい女の素はだかの感覚から

忘れた夏の記憶が漏電する。

ほうつほうつと蛍が光る。

不思議な晩だ、まだ鋏を取つたまま

何時までも足の爪を剪きつてゐるのか、お前は
泊サフラン芙藍湯の温かな匂ゆから、

香料のやはらかなげきから、
おしろいから、

夏の日のあめも美しく

女は踊る、なつかしいドガの Dancer

雪がふる……降つてはつもる……

しめやかな悲しみのリズムの

しんみりと夜ふけの心にふりしきる……

ほうつほうつと、蛍が飛ぶ……

あれごらん、綺麗なこと、

青、黄、緑、……さうしてうすいむらさき、

雪がふる……降つてはつもる……

そつとしておきき、何処かでしめやかな三味線が、

あれ、もう消えて了つた、鳴いたのは水鳥かしら、

硝子を透してごらん、小さな赤い燈が

ゆつくと滑つてゆく、河上の方に

紀州の蜜柑でも積んで来たのかしら……

何だか船から喚よんでるやうな……

ひつそりとしたではないか、

もう一度、その薄い硝子からのぞいて御覧、

恐らく紺いろになつた空の下から、

遠見の屋根が書割のやうに

白く青く光つて

疲れた千鳥が静な水面に鳴いてる筈だ。

サラリとその硝子を開^あけて御覽……

スツカリ雪はやんで

星が出た、まあ何て綺麗だらうねえ、

あれ御覽、真白だ、真白だ。

まるでクリスマススの精霊のやうに、

ほんとに真白だねい。

四十四年十一月

冬の夜の物語

女はやはらかにうちうなづき、

男の物語のかたはしをだに聴き逃のがさじとするに似たり。

外面そともにはふる雪のなにごともなく、

水仙のパツチリとして匂へるに薄荷酒はつかさけ青く揺ゆらげり。

男は世にもまめやかに、心やさしくて、

かなしき女の身の上になにくれとなき温情を寄するに似たり。

すべて、みな、ひとときのいつはりとは知れど、

互かたみになつかしくよりそひて、

ふる雪の幽かなるけはひにも涙ぐむ。

女はやはらかにうちうなづき、

湯サモワル沸のおもひを傾けて熱あつき熱あつき珈琲を搔きたつれば、

男はまた手をのべてそを受けんとす。

あたたかき暖炉はしばし息をひそめ、

ふる雪のつかれはほのかにも雨をさそひぬ。

遠き遠き漏電と夜の月光。

四十四年一月

キヤベツ畑の雨

冷^{ひえ}びえと雨が、さ霧^{ぎり}にふりつづく、
キヤベツのうへに、葉のうへに、
雨はふる、冬のはじめの乳緑の
キヤベツの列^{れつ}に葉の列に。

あまつさへ、柵の網目の鉄^{はり}条^{がね}に
白^{とりめ}い鳥奴が鳴いてゐる。

雨はふる、くぐりぬけてはいきいきと、
色と匂を嗅ぎまはる。

ささやかな水のながれは北へゆく。

キヤベツのそばを、葉のしたを、

雨はふる。路もひとすぢ、川かはしも下の

街まちも新らし、石の橋。

キヤベツ畑のあちこちに

かがみ、はたらき、ひとかかえ

野菜かついではしるひと、

雨はふる。けふもあをあを夏帽子。

小父をぢさんが来る、真まつ蒼さに、脚あしも顫ふるへて、
 お早はやうがんです。山さん子ざしの芽めもこわごと
 泥どろにまみるる。立ちばなし。

雨あめはふる。しつかと握にぎる水みづ薬くすりの黄き色いろの罎びんの鮮あざやかさ。

「阿あ魔まつ子こがね昨ゆう夜べさ、

いいらぶつ吃た驚まげた真ま似ね仕し出しかかし申ましてのお前まへさま。」

雨あめはふる。光ひかつては消きゆる、剃かみ刀そりで

咽のど喉のどを突ついた女おんなの頬ほ。

「だけんどうかかうか生きるだらうつて、

医者どんも云やんしたから。」まづは安心と軍鶏屋しやもやの小父をぢさん
胸をさすればキヤベツまで
ほつと息する葉の光。

鳥が鳴いてる……冬もはじめて真実しんじつに

雨のキヤベツによみがへる。

濡れにぞ濡れて、真実に

色も匂もよみがへる。

新らしい、しかし、冷つめたい朝の雨、

キヤベツ畑の葉の光。

雨はふる。生きてしたく滴る乳緑の
キヤベツの涙、葉のにほひ。

蕨

春と夏とのさかひめに
生絹きぎぬめかしてふる雨は
それは「四月」のしのびあし、
過ぎて消えゆく日のうれひ。

四十四年一月

蕨の青さ、つつましき、

花か、巻葉か、知らねども、

その芽の黄さ、きな新らしき……

庭の井戸から水揚げて、

しみじみと撰える手のさばき、

見るもさみしや、ふる雨に。

ひとりは庭のかたすみ、

印半纏着てかがみ、

ひとりはほそき角かくばしら柱、

しんぞ寥さみしう手をあてて、

朝のつかれの身をもたす

古い宿場の青楼。かしざしき

しとしとしととふる雨に

柱時計の羅馬字も

蓋ふたも冷たしつめ、しらじらと

針のIVを差すその面。おもて

ひとりはさらに水あげて、

さつと蕨の芽にそそぎ、

ひとりはじつと眼をふせて、

楊枝^{やうじ}つかへり弊私^{ヒステリー}的里の
朝のつかれの身だしなみ。

空と海との燻^{いぶ}し銀^{ぎん}、

けふの曇りにふる雨は

それは涙のしのびあし、

青い台場の草の芽に

沁^しみて「四月」も消えゆくや、

帆かけた船も、白鷺も

ましてさみしやふる雨に。

もののははれにふる雨は、

さもこそあれや、さわらび早蕨の

その芽に茎に渦巻きて

はやも「五月」は沁しむものを

なにかさみしきそのおもひ。

春と夏とのさかひめに

きぎぬ生絹めかしてふる雨は

それは「四月」のしのびあし、

過ぎて消えゆく日のうれひ。

四十四年四月

涙

蒼ざめはてたわがこころ、

こころの陰かげのひとすぢの

神経の絃いとそのうへに、

ツワイライト
薄明のその絃いとに、

ツワイライト
薄明のその絃いとに、

ちらと光りて薄青く、

踊るものあり、豆のぶごと……

雨は涙とふりしきる。

見れば小さな エメラルド 緑玉、

ひとのすがたのびいどろの、

頬にも胸にもふりしきる、

涙……かなしいその眼つき。

声もえたてぬ あや 奇しきは

よは 夜半に「秘密」の抜けいでて、

しよき 所作になげくや、ただひとり、

パントマイムの涙雨。

月の出しほの片あかり、
薄き足もつびいどろの、
肩に光れどさめざめと、
歎き恐れて、夜も寝ねず。

金きんのピアノの鳴るままに、
濡れにぞ濡るれすべもなく、
神経いとの上、絃いとのうへ、
雨は涙とふりしきる。

四十四年十月

新生

新らしい真黄色まつきいろな光が、

湿しめつた灰色の空——雲——腐れかかつた

暗い土蔵の二階の窓に、

出窓の白いフリジアに、髓の髓まで

くわつと照る、照りかへす。真黄な光。

真黄色だ真黄色だ、電線でんせんから

忍びがへしから、庭木から、倉の鉢まきから、

雨あまだれ滴が、憂鬱が、真黄に光る。

黒猫がゆく、

屋根の廂ひさしの日光のイルミネエション。

ぽたぽたと塗りつける雨、

神経に塗りつける雨、

靈魂の底の底まで沁みこむ雨

雨あがりの日光の

鬱悶の火花。

真黄まつぎだ……真黄まつぎな音楽が

狂犬のやうに空をゆく、と同時に

俺は思はず飛びあがつた、驚異と歓喜に

野蛮人のやうに声をあげて

匍ひまはつた……真黄色な灰色の室を。

女には児がある。俺には俺の

苦しい矜がある、芸術がある、而して欲があり熱愛がある。

古い土蔵の密室には

塗りつぶした裸像がある、妄想と罪悪と

すべてすべて真黄色だ。——

心臓をつかんで投げ出したい。

雨が霽れた。

新らしい再生の火花が、

重い灰色から変った。

女は無事に帰った。

ぼたぼたと雨だれが俺の涙が、

真黄色に真黄色に、

髓の髓から渦まく、狂犬のやうに

燃えかがやく。

午後五時半。

夜に入る前一時間。

何処どっかで投げつけるやうな

あかんぼの聲がする。

四十四年十月

四十四年の春から秋にかけて自分の間借りして居た旅館の一室は古い土蔵の二階であるが、元は待合の密室で壁一面に春画を描いてあつたそうなる、それを塗りつぶしてはあつたが少しづつくづれかかつてゐた。もう土蔵全体が古びて雨の日や地震の時の危ふさはこの上もなかつた。

黄色い春

黄色きいろ、黄色、意気で、高尚かうとで、しとやかな

棕櫚の花いろ、卵いろ、

たんぽぽのいろ、

または兎猫の眼の黄いろ……

みんな寂しい手ぎはりの、岸の柳の芽の黄いろ、

夕日黄いろく、粉こなが黄いろくふる中に、

小鳥が一羽鳴いる。

人が三人泣いてゐる。

けふもけふとて紅べにつけてとんぼがへりをする男、

三味線弾きのちび男、

にわかめくら俄盲目のものもらひ。

まち街の四辻、古い煉瓦に日があたり、

窓ひよけの日覆に日があたり、

こな粉屋の前の腰掛に疲れ心の日があたる、

ちいちいほろりと鳥が鳴く。

空に黄色い雲が浮く、

黄いろ、黄いろ、いつかゆめ見た風も吹く。

道化男がいふことに

「もしもし淑女、レディとんぼがへりを致しませう、

美しいオフェリヤ様、

サロメ様、

フランチエスカのお姫様。」

白い眼をしたちび男、

「一寸、先生、心意気でもうたひやせう」

にわかめくら　うしろ
俄盲目も後から

「旦那様や奥様、あはれな片輪で御座います、

どうぞ一文。」

春はうれしと鳥も鳴く。

おくさん
夫人、

美しくしい、かはいい、しとやかな

よそのおくさん夫人、

御覧なさい、あれ、あの柳にも、サンシユユにも

黄色い木の芽の粉こが煙り、

ふんわりと沁む地のにほひ。

ちいちいほろりと鳥も鳴く、

空に黄色い雲も浮く。

おくさん
夫人。

美しい、かはい、いとやかな

よその夫人おくさん、

それではね、そつとここらでわかれませう、
いくら行いつてもねえ。

黄色、黄色、意気かうとで高尚で、いとやかな、

茴香うゐきやうのいろ、卵いろ、

「思おもひ出」のいろ、

好きな児猫の眼の黄いろ、

浮雲のいろ、

ほんにゆかしい三味線の、

ゆめの、夕日の、音ねの黄色。

四十五年三月

汽車はゆくゆく

汽車はゆくゆく、二人ふたりを載せて、

空のはてまでひとすぢに。

今日は四月の日曜日どんたくの、あひびき日和びより、日向雨ひなたあめ、

塵にまみれた桜さへ、電線はりにさへ、路次にさへ、

微風そよかぜが吹く日があたる。

街まちの瓦みを瞰下ろせばたんぽぽが咲く、鳩が飛ぶ、

煙があがる、くわんしやんと暗い工場の槌が鳴る

なかにをかしな小屋がけの

によつきりとした野呂間顔のろまがほ。

青い布きれかけ、すつぽりと、よその屋根からにゆつと出て

両手りやうてつん出す弥次郎兵衛姿すがた、

あれわいさの、どつこいしよの、堀抜工事の木遣きやりの車、

手をふる、手をふる、首をふる——

わしとそなたは何処どこまでも。

汽車はゆくゆく、二人を乗せて

都はづれをひとすぢに。

鳥が鳴くのか、一寸と出た亀井戸駅の駅長も

芝居がかりに戸口からなにか恍然うつとりもの案じ、

棚に載のつけたシネラリヤ、

紫の花、鉢の花、色は日向ひなたに陰影かげを増す。

いたづらもの
悪戯者の兎守さへ、けふは下から真面目まじめ顔、

ふたつ並べたその鼻あなの孔すがめに、眇眼すがめに、まだ歯も生えぬ

ただ揉もみくちやの泣なき面つらのべそかき小僧が口の中うち

蒸気噴ふきつけ、驀まつ進しぐら、パテー会社フィルムの映画の中の

汽車はゆくゆく、——空飛ぶ鳥の

わしとそなたは何処どこまでも。

汽車はゆくゆく、二人を乗せて、

広い野原をひとすぢに。

ひとりそはそは、くるりくるくる、

水車みづぐるま

廻る畑はたけのどぶどろに、

葱のあたまがとんぼがへりて泳ぎゆく、

ちびの菜種まつきの真黄いろ

堀に曳きずる肥舟こえぶねの重い小腹にすられゆく。

さても笑止や、垣根のそとで

障子張るひと、椿の花が上に真赤に輝けば

張られた障子もくわつと照る、

鳥勘左衛門、鳥啼かせてくわつと吹く

よかよか飴屋のちやるめらも

みんなよしよし、粉こなぶくろ囊かぶやつこらさと担かついで、

禿こなやげた粉屋も飛んでゆく。

蒸気ふ噴ふき噴ふき、斜はすかひに

汽車はゆくゆく……椿が光る。

わしとそなたは何処どこまでも。

汽車はゆくゆく二人を乗せて

空のはてまでひとすぢに。

硝子窓から微風そよかぜ入れて、

煙草吹かして、夕日を入れて、

知らぬ顔して、さしむかひ、——
下ぢや、ちよいと出す足のさき
ついと外せそらばきゆつと踏む、——
雲のためいき、白帆のといき
河が見えます、市川が。

汽車はゆくゆく、——空飛ぶ鳥の
わしとそなたは何処までも。

梨の畑

あまり花の白さに

四十五年四月

ちよつと接吻きすをして見たらば、

梨の木の下に人がゐて、

こちら見では笑うた。

梨の木の毛虫を

竹ぎれでつつき落し、

つつき落し、

のんびり持った*喇叭で

受けて廻つては笑うた、

しよぎいなやの、

梨の木の畑の

毛虫採のその子。

* 紙製の喇叭見たやうなもの

四十五年四月

河岸の雨

雨がふる、緑いろに、銀いろに、さうして薔薇いろに、薄黄に、
絹糸のやうな雨がふる、

うつくしい晩ではないか、濡れに濡れた薄あかりの中に、
雨がふる、鉄橋に、町の燈火あかりに、水面に、河岸かしの柳に。

雨がふる、啜泣きのやうに澄すみきつた四月の雨が

二人のこころにふりしきる。

お泣きでない、泣いたつておつつかない、

白い日傘パラソルでもおさし、綺麗に雨がふる、寂しい雨が。

雨がふる、憎くらしい憎くらしい、冷たいつめ雨が、

水面に空にふりそそぐ、まるで汝の神経おまへのやうに。

薄情なら薄情におし、薄い空気草履の爪先に、

雨がふる、いつそ殺してしまひたいほど憎くらしい汝の髪おまへの毛に。

雨がふる、誰も知らぬ二人の美くしい秘密に

隙間すきまもなく悲しい雨がふりしきる。

一寸おきき、何処かで千鳥が鳴く、
歇私的里の靈ヒステリーたましひ、
濡れに濡れた薄あかりの新内。

雨がふる、しみじみとふる雨にうち連れて、雨が、

二人のところが啜泣く、三味線のやうに、

死にたいつていふの、ほんとにさうならひとりでお死に、

およしな、そんな気まぐれな、嘘うそつぱちは。私わたしはいやだ。

雨がふる、緑いろに、銀いろに、さうして薔薇色ばらに、薄黄に、
冷たい理性の小雨がふりしきる。

お泣きでない、泣いたつておつつかない、

どうせ薄情な私たちだ、絹糸のやうな雨がふる。

四十五年五月

そなた待つ間

チヨンキナ、チヨンキナ、

チヨンキナ踊を、

けふの踊をひとをどり。

そなた待つとて、いそいそと、岡を^{のぼ}上れば日^{まは}が廻る、

雲も草木もうつとりと、

それかあらぬか、わがこころまる円い真赤まつかな日まはが廻る。

チヨンキナ、チヨンキナ、

チヨンキナ踊を、

岡の草木がひとをどり。

そなた待つとて、ピンのさき池に落せばくるくと、
生きて駈けゆく水すまし、

それかあらぬか、投げ棄てたマニラ煙草の粉この光。

チヨンキナ、チヨンキナ、

チヨンキナ踊を、

池の面おもてがひとをどり。

そなた待つとて、夏帽子投げて坐れば野が光る

ほけた鶯すみればな、

それかあらぬかたんぽぽか、羽蟻飛ぶ飛ぶ、野が光る。

チヨンキナ、チヨンキナ、

チヨンキナ踊を、

榆にれの羽蟻がひとをどり。

そなた待つとて、そはそはと風も吹く吹く、気も廻る。
空に真赤な日も廻る。

それかあらぬか、足音か、胸もそはそは気も廻る。

チヨンキナ、チヨンキナ、

チヨンキナ踊を、

白い日傘がひとをどり。

* チヨンキナの繰返しはやはりチヨンキナの囃子にて歌ふ。

四十五年五月

「思ひ出」の頁ペエジに

さかづきひとつうつして、

ちらちらと、こまごまと、

薄荷酒つを注げば、

緑はゆれて、かげのかけ、仄かなわが詩に啜り泣く、

そなたのこころ、薄荷ざけ。

思ひふ子の額ひに

さかづきそつと透かして、

ほればれと、ちらちらと、

薄荷酒をのめば、

緑は沁^しみて、ゆめのゆめ、黒いその眸^めに啜り泣く、

わたしのこころ、薄荷ぎけ。

四十五年四月

白い月

わがかなしきソフイーに。

白い月が出た、ソフイー。

出て御覧、ソフイー。

わすれなくさ
勿忘草のやうな

あれあの青い空に、ソフイー。

まあ、何^なんて冷^{ひや}つこい

風^{かぜ}だらうねえ、

出て御覧、ソフイー。

綺麗だよ、ソフイー。

いま、やつと雨がはれた——

緑いろの広い野原に、

露がきらきらたまつて、

日が薄^{うっ}すりと光つてゆく、ソフイー。

さうして電話線の上にね、ソフイー。

びしょ濡れになつた白い小鳥が

まるで三味線のこまのやうに留つて、
つくねんと眺めてゐる、ソフイー。

どうしてあんなに泣いたの、ソフイー。

^{こま}
細かな雨までが、まだ、

新内のやうにきこえる、ソフイー。

——あの涼しい楡の新芽を御覧。

空いろのあをいそらに、

白い月が出た、ソフイー。

生きのこつた心中の

ちやうど、片われでもあるやうに。

芥子の葉

芥子は芥子ゆゑ香もさびし。

ひとが泣かうと、泣くまいと

なんのその葉が知るものぞ。

四十五年四月

ひとはひとゆゑ身のほそる、
芥子がちらふとちるまいと、
なんのこの身が知るものぞ。

わたしはわたし、

芥子は芥子、

なんのゆかりもないものを。

四十五年五月

余言

本集名づけて東京景物詩と呼べども、その実は「邪宗門」以後に於けるわが種々雑多の異風の綜合詩集にして、輯むるに殆ど何等の統一なし。ただ何れもわがひと頃の都会趣味をその怪しき主調とせるは興趣相同じ。作品の多数は四十三年「PAN」の盛時に成れるものの如く、且つ又邪宗門系の象徴詩より一転して俗謡の新体を創めたるも概ねその前後なり。なお最近大正の所作はこれに加へず。此集もと昨春或はその前年末にも公にすべかりしも、人生災禍多く些か上梓の時機遅れたるを憾みとす。

東京、東京、その名の何すればしかく哀しく美しくしきや。われら今高華なる都会の喧騒より逃れて漸く田園の風光に就く、やさしき粗野と原始的単純はわが前にあり、新生来らんとす。顧みて今復東京のために更に哀別の涙をそそぐ。

大正二年 初夏

相州三崎にて

著者識

青空文庫情報

底本：「白秋全集 3」岩波書店

1985（昭和60）年5月7日発行

※底本では一行が長くて二行にわたっているところは、二行目以降が1字下げになっています。

入力：飛鷹美緒

校正：小林繁雄

2009年4月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

東京景物詩及其他

北原白秋

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>